
あるいは花でいっぱいの世界

ヒムロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あるいは花でいっぱいの世界

【Nコード】

N4980J

【作者名】

ヒムロ

【あらすじ】

名も無き旅人と名も無き少女の小さなたびの物語。

どうか、ゆったりとした気持ちで御付き合いください。

——愛することが出来ますか？ 感情を失った、この世界のことを。

風の音が聴こえる。

遠くから。近くから。どこからともなくそいつはやってきて俺の体をかすめて消える。

さながら空を飛んでいるかのようにだった。自由に何の気兼ねや苦痛もなく、この大気の中を鳥のように飛び回っている。そんな心地よい想像が頭の中を巡っていた。

目の前に広がる広大な砂漠。見上げれば雲ひとつない青空。他に俺の視界を遮らんとするものは何一つない。そんな絶景が俺の心を豊かにさせているのだろう。自然と情緒溢れる想像が脳内に分泌されてゆくようだった。

両腕を伸ばす。指先に触れる空気が心地よい。

目に見える景色を絵画にしようとすれば、いとも簡単に出来上がってしまうことだろう。どんなに描画の才能がない人間だとしても、手に取るクレヨンの色さえ間違えなければいいのだから。

だがしかし、この空気を感知取ることが出来るのは、今ここに足を置いている俺だけだ。世界中の誰であろうと、今見える景色や思索を読み取れる人間など存在しない。俺の世界は、俺自身の中で完結され、閉ざされているのだ。

だから俺はどこまでも行ける。この世界が本当に終わるときまで、歩き続けられる。

足を上げ、降ろす——そんな単純な動作で、俺は前進できる。

スタート地点にすら到達していない俺は、永遠にゴールへ辿り

着くこともない。静かにこの大気を感じていればいい。足の裏が大地に触れる、この感触を楽しむことができるなら。

それは俺の本望なのだ。

「こんにちはっ」

声が聴こえた。凜とした声、それでいて余りある幼さを湛えた不思議な声だ。

「旅人さんかなっ。だったらお話、聴かせてほしいな」

少女だった。栗色の髪を肩まで伸ばした、ほんの小さな女の子。

人の姿を認めるのは久しぶりの出来事。俺は些か動揺していた。その幼い少女は、何もない砂漠から突然現れたのだ。何の前触れもなく、それはまるで風のように。

大気を流れる風と違うところと言えば、すぐに消え去ってしまった。わなないことだった。少女は尚も俺に話しかけていた。

「今まで行つた町とか、おいしかった食べ物とか、出会った動物さんとか、お話をした人のこととか。なんでもいいから教えてほしいな。ね、旅人さん」

何なのだろうか、この少女は。どこぞの見知らぬ男に、安易な気持ちで近寄ることの危険性を理解していないのだろうか。もしくは、俺の荷物を盗みにでも来たのだろうか。一体何が狙いだ？

「おまえ誰だ？ どこからやって来た」

「んー？ わかんない」

首を傾げてそう答えた。頭上にクエスチョンマークが浮かんで見えるような、典型的な疑問のジェスチャーだ。

だしかし俺は、そのような愛らしい仕草に騙されるような男ではない。何より少女を愛好するような変態的趣味は持ち合わせていないし、他人にそう易々と心を許したりはしないのだ。

「それなら故郷は。どこの田舎の生まれだ」

「んー？」

尚も首を傾げる。その攻勢を崩す気はさらさらないらしい。まるで質問の意味を理解していないかのような対応の仕方だった。

「なら名前は。いくらなんでも自分の名くらい分かるだろ」
「ないよ」

少女はそう発音した。俺は、その返答の意味するところを理解するのに数秒のときを要した。

——名前が無い。

こんなところに。こんなにも広い砂漠の中心で。

少しの憂いもなく翼を広げられるこの自由の中で、それゆえに苦しむ人間が存在した。

「ボク、なまえ持っていないんだ。旅人さんは？　なんていうなまえなの？　教えてほしいな」

温かな祝福の中で誕生することなく、やさしい腕に抱かれることもなく育ってきたのだろうか。

ならば、その笑顔はどこからくるものなのだろうか。奇跡のようなその表情の美しさはどのようにして作られているのだろうか。俺が教えてほしいくらいだった。

「俺も名前を持っていない」

「わ。ボクとおんなじだ。じゃあ、ボクと旅人さんは友だちだね。ね？　旅人さん」

「友達……？」

「そう、友だち。今からボクらは、友だち。友だちはね。楽しいことをきょーゆーできるんだよ。それはすごく幸せなこと。それに一緒にお話もできるし、お話すれば苦しいことも辛いことも忘れていられる。ボク、旅人さんの楽しいお話、いっぱい聞きたいなっ」
名もなき少女は笑っている。媚びるような卑しさもなく、諦めのような悲しさもない、本当に楽しそうな笑顔だった。

これからの希望を信じて疑わない。そんな強さを感じた。

「おまえは、辛くないのか？」

「え……？」

少女は驚いたような顔になる。俺の示す表情が「笑い」でないことを、意外に感じているように思えた。

「名前を持っていないことを苦痛に感じたことはないのか、おまえは。名前は、自分の存在を証明できる数少ない方法のひとつだ。誰も自分の名を呼んではくれないんだぞ。それは存在を否定されていることと同じだ。辛くはないのか、おまえは？」

そう俺は問うた。その問いの答えを、俺自身も持ち合わせてはいないというのに。

「——だいじょーぶだよ。ボクはここで笑っていられば、それでいいんだよ。……だって、ボクはここにいるから。それだけで幸せ」少女は笑っている。辛いことがない人生など有り得ないというのに、それでも笑っていた。絶対的な世界の仕組みを、真っ向から覆すかのように、その笑顔を崩すことはしなかった。

「いいのか、それで」

「うんっ」

「そうか」

小さな少女は強かった。俺にはない、とてつもない強さを持っていた。

「そうだ、旅人さんは——うーん、なんだか呼びにくいね、『たびとさん』って。……そうだっ、なまえを決めちゃえばいいんだよっ」

「そりゃあ、いいアイディアだな。しかし、んな簡単に……」

名を付けられることは、俺が生きてきた長い年月を否定すること。名前の無いことは、俺が俺である所以でもあるのだ。

これまでの旅の中、様々な人間と出会い、別れた。その全ての人に名前はあった。自らの名前を愛おしそうに呼ばれ、大切な人にゆっくりと振り向いていた。その誰もが皆、笑顔だった。紛れも無い本物の笑顔を、その名を呼ばれることによって作り描いていた。

俺にはそんな名前が無かった。要らなかった。嫌いだった。忌んでいた。疎んでいた。貶していた。

名前のない自分を。

しかし、名を授かることによって、世界から存在を肯定されるの

もまた事実。辛苦から脱却できることも、紛れもない事実なのだ。

「ダイチ」

「あ……？」聞き慣れないその単語に面食らう。

「旅人さんのなまえは、今日からダイチ」

いとも簡単に少女は名づけた。永遠とも思える長い時間の中で、苦しみでしかなかった『名前』を決め、存在を証明してくれた。

「ダイチ。ダイチか……」

小さく呟いてみる。その言葉は風に消えることなくはつきりと響いた。

「そう、ダイチさん。いいなまえだよ……ね？」

「ああ。いい名だ。世界中どこ探したって、こんなぴったりの名前はないな」

俺はそう言っただけ。少女の笑顔を見ていたからだ。そうすることで、少女の強さを感じ、少しでも俺の弱さを消してくれるような気がした。

「よかった、喜んでくれて。大地は、きれいだもんね。すっごく広くて、すっごく強くて、見てるとどこまででも行ける気がするからうん、われながら上出来だよ」

腰に手を当て胸を張る。幼い容姿と仕草の中に、何故だか大人びた部分を垣間見ることができる。

——そうか。

人は名前を与えると、親になるのか。

「次はボク。ダイチさんが決めていいよ。とびっきりのをよろしくね」

「俺が……か？」聞き慣れない呼び名に反応が遅れる。

不思議な感覚だ。まるで、正座で痺れた足が自分のものでないような感覚に陥ったときのよう。ふわふわしてうまく歩き出すことができない。それでも走り出してしまえば何ということはない、すぐに元の感覚を取り戻すことができる。

「——ソラ」

そんな言葉が口をついた。最初から決まっていた事項のように、言い慣れた単語のように、俺は滑らかにその名前を発音した。

「おまえの名はソラだ。どうだ、大絶賛必至の最高の名前だろ？ なんせ頭上に広がる青空と同じ名を冠するんだからな。空のない世界など存在しないし、あつたとしてもつまらないだろ？ だからソラだ」

「——ソラ。ソラ。……うん、いいなまえ。ボクなんかにつけるのは勿体無いくらいだよ」

「そんなことはない。ぴったりだ」

「そう……かな。ボク、この広い空みたいに大きく、強く、やさしくなれる……かな？ 誰かを救うことができるのかな？ 歩き続けることはできるかな？ こんな……小さくて、弱いボクでも」

少女の笑顔が弱々しくなっていく。冬を迎えようとする小さな花のように。

「ああ、なれるさ。それにおまえは弱くなんかないだろ。こんな世界でも笑っていられるんだからな。俺には出来ない芸当だ」

「……うん。ありがと………うっ………ひぐっ………」

嗚咽が漏れる。それは突然の出来事のように思えて、俺はうろたえてしまう。

しかし、少女は泣いてはいなかった。目に溜まる涙を袖で擦り、こぼれ落ちるのを防いでいる。口元はわななき、今にも泣き顔に変わろうとしている。

しかし、少女は泣いていなかった。

冷静になつて考えてみれば会ったばかりの少女から名前を貰い、与えるという行為は普通ではないのだ。親から子へ伝わる大切なものであり、最初の贈り物なのだ。なのに、俺はこの状況を受け入れてしまっている。晴れすぎた空がそうさせるのだろうか、今の俺には分からなかった。

俺は少女の頭に手を置いた。柔らかな髪感触が手のひらを伝う。

「おまえの目的は、何だ？」

「え……？」

「ここにいる目的。旅をする目的だ。俺にはある。それは——人を笑わせることだ。憎んでいたり、悲しんでいたり、寂しがっていたり、泣いていたりする見知らぬ誰かを笑顔にさせる。世界中、というわけにはいかないけどな。せめて俺の手の届く場所くらいは、笑いでいっぱいにさせてやりたいんだ。……けどな、こんな女の子ひとりを泣かせているようじゃ、目的は永遠に達成されることはない」少女は俯いている。その表情を確認することは叶わない。

しかし俺が願う表情はただひとつだった。

「笑ってくれ。小さくたって、弱くたっていい。——俺だって弱いからな。この旅の途中でも何度も投げ出しそうになった。これからだってそうだ。終わりの見えない旅の中、小さな過酷に挫けてしまうこともある。そんなとき俺は笑いに救われる。無垢に笑う子供たちや、その母親や父親を見て、また歩き出すことができるんだ」長い旅路を一人で歩けるはずがない。俺は「強い人」でもなければ、「飛べる翼」を持っているわけでもないのだ。たった二本の足で、雄大な大地と果て無き大空に挑まなくてはならない。

「頼っていいんだ。辛かったら誰かの腕にしがみつけ。すがれ。甘えろ。そしてまた……歩き出せ」

「……うん」少女は顔を上げた。潤んだ瞳。

しかし笑っていた。

どんな過酷も跳ね除けてしまいうちに、砂漠に咲いた小さな花のよう

に。そんな一輪の名もなき花を、俺は守りたいと思った。そしてすがりたいと思った。

「行くぞ。ソラ」

俺は歩き出す。大地と空が交わる場所を目指して。

ソラは俺の隣に並ぶ。どんな過酷が待ち受けていようと地平線が目の前に在り続けているように、少女の歩みは、ごく自然なもの

だった。

「行こう、ダイチさんっ」
風の音が聴こえる。

1（後書き）

読了していただけたのなら、本当にありがとうございました、という言葉の他にお伝えしたいことはございません。今後ともよろしくお願いいたします。

夢

歩いていた。脚を振り上げて、降ろす。

それはまるで、夢を見ているかのようにだった。

遠い、誰かの夢の中。

視界に映るものは、何もない。木も花も風も空も雨も雲も音も土も時間も季節も。この世界は全てを失った。生きとし生けるものすべて、そして流れゆく概念さえも、存在することを許されなかった。

ただ独り、ボクだけを残して。

世界は終わった。今、感じる事が出来るのは体の重みと心の辛さだけ。そんな苦しみが生きていることを証明してくれる。

闇の世界で重い脚を動かしているうちに、ふと考えてしまうことがある。

自分は本当に存在しているのだろうか？ それを確実なものとしたところで、世界は変わるのだろうか？ 終わっているこの世界で？ 何のために？ 誰のために？

ボクの目に視えていないだけで、そこに美しい景色は広がっているのかもしれない。ボクが、それを感じるだけの強さを持っていないだけで、素晴らしい世界は、まだそこにあるのかもしれない。けれど、そのきれいなものを感じられるヒトがここにはいなかった。

感じるものの出来ない世界は、つばさを失った鳥と同じ。存在していないのと同じ。

世界は終わっていた。

不意に体中に何かが駆け抜けた。言い得ない嫌な感覚。痛みとも痒みとも苦しみとも違う。呻こうとしても、喉から湧き出た振動は、虚しく空を切って存在を消した。

行き場のないその感覚は、踏みしめているはずの大地の実感さ

えも消してゆく。全てが失われてゆく。

痛みを感じられたらいいのに。そうすれば、立ち止まることが出来るのに。

今日が雨の日ならよかったのに。それならきっと、涙を流せたのに。

終わった世界が、全てを剥ぎ取ってゆく。

ボクは足を動かし続けた。

何のためだろう。

決まっている。

ボクが存在しているということを証明し続けるためだ。

さて、どこへ行こうか。

決まっている。

前へ。前へ。

この脚が動かなくなるその瞬間まで。

遠くへ。遠くへ。

いつか、誰かの救いを求めて。

旅というものには、往々にして奇怪な出来事がついて回る。これは自然の摂理であり、免れることのできない絶対的な運命でもあるのだ。

それを求めて旅をする人間もいるのだし、そこに楽しみや良い意味でのスリルなどを見出せるのならば、俺は一向に構うことなくそいつらを素通りして走り去る。全速力で。そんな好奇心旺盛な奴とは関わりたくないし、個人の趣味嗜好に口出しする権利は誰にもないからだ。

事実、これまでの旅中において俺は、そのような奇怪な事象に数多く遭遇してきた。

『奇怪』のベクトルがどちらに向いていたとしても、逃れようのない事実として受け入れてきたのだ。

だがしかし。度が過ぎるのは困る。

『小銭を拾った。百円玉一枚』

などは他愛もないラッキーな話に終わるが、

『小銭を拾った。しめて二兆円分こんもりと』

だったならば、何らかの陰謀を感じずにはいられない。というかびびる。触れたらいけない匂いがプンプンする。二枚ほどネコババするだけで三日間はうなされるな。んなこと絶対にありえないが。

兎に角、何事にも限度というものは存在する、ということだ。

例えば『砂漠から女の子が突然現れる』というのはどうだろうか。

『嘘だ。そんなことありえる筈がない。大体、小さな女の子が広大な砂漠を一人で歩いて来れるわけがないだろう。よく考えてみる。おまえは体のいい夢を見ているんだよ。……しかし、いくら人恋しいからといって、幼い女の子の幻を見るお前もどうかと思うぞ……』
そう思った人。正解だ。実に常識的な考えを持っている。

「——ダイチさん。おなか、空いてない？」

「いや、取り立てて空腹感はないな」

「そ、そう……」

オアシスにいて、水を飲んでいた。木陰に入り、歩行に疲れた足の疲れを取っていた。

普段なら、一人黙って空を眺めていたり、次の町のことを考えていたりするのだが、現在は勝手が違っていた。
ぐううううう……。

このような音声が耳に飛び込んできた時。今までならば、飢えた野獣を想像し、ナイフ片手に身構えていたことだろう。

「あ、わ。い、今のはただのあいさつ。あいさつだよ？ ほら、そこにいる虫さんに。……けっして、おなかが空いて空いて仕方がない、っていうわけじゃないからね？ ヘンな思い込みをしちゃ、だめだよ？」

こんな言い訳が聴こえてきたら、俺はどんな対応をすればいいのだろう？

幻聴と決め込んで無視をすればいいのか？ いや、それ以前に会話をしているからな。今更上の空もないだろう。

「ほら、これ食えよ」

俺は小さな焼き菓子が入った袋を手渡す。一つ前の村で貰った品だ。

「わ、ありがと。……なんだろう、これ」

中のひとつを摘んで、不思議そうに眺めている。

「クッキーだ。小麦粉と卵を練って焼いた菓子だな。知らないのか？」

「うん。はじめて見たよ。食べていいのかな？」

「ああ」

「いただきますっ。……んぐんぐ。……おいしー！ すごくおいしいよ、これっ」

満面の笑みだ。この表情を見れば、菓子職人のオヤジもさぞ報わ

れることだろう。

「んぐんぐ……んぐんぐ」

口に入れては咀嚼し、それが無くならないうちに、次を口へ投げ入れる。小袋は見る見るうちにしぼんでいった。

ソラは始終、笑顔である。

「ダイチさんも食べる？ ……わ、あとひとつしかない」

小さなクッキーが手のひらに乗っかっていた。ソラはそれを見つめ、うんうんと唸っている。どうにかしてクッキーを増やそうとでもしているのだろうか。

「いや俺はいいから。ソラ、おまえが全部食べるよ」

「そんなわけにはいかないよ。ダイチさんにも食べてほしい」

「そうか」

「そうだよ。おいしいものは、みんなで食べるのが一番なんだよ？ わかってるかな？」

何故に俺は、明らかに十歳は年下であろう少女に『食卓は大勢で囲もう論』なるものを諭されなければならないのだろうか。もとを正せばそのクッキーは俺の所有物であった物だし、そもそも俺は甘いものが好きではない。

「はい、ダイチさんっ」

目の前に突き出された小さな手のひら。その上には二分割されたクッキーが載っていた。

「——半分こ、だよ。こうすればボクも、ダイチさんも食べられる。二人で食べればおいしさ倍増、楽しさ倍増。どんなことでも二つに分けちゃえばいいんだよ。——はい、ダイチさんっ」

手渡されたクッキーの片方を口に入れる。

甘い。

しかし久しぶりに食したクッキーの味は、これからも忘れることはないだろう。そう強く感じた。

——こんな現実。こんな幸せな今を過ごしていること。これらの全てが、砂漠の見せた幻想なのだとしたら。

さつさと醒めて欲しかった。愛着が湧き、どうしようもなく
る前に終わってしまうことを願った。今、この瞬間なら諦めがつく
だろうから。

現実こそが造られたもの。

例えば、『世界はたった三秒前に誕生したばかりであり、人類
の記憶はすべて偽りのもの。俺たちは、誰かの手の上で踊らされて
いるに過ぎないのだ』というありえない仮説。

そんな仮説を否定する術を俺たちは持っているのか？ どうし
てあり得ないものをあり得ないと断言できる？ そして常識人を自
称する者達は、今の俺のけつたいな状況を何ゆえに夢芝居だと断言
できるのだ？

この世界は根拠のない仮説ばかりに満ち、それ故に成り立って
いる。誰も真実を証明することなど出来はしないのだ。……すまん、
詭弁だな。

しかし現実には現実であり、どう逃避したところでリアルから逃
れることはできないのだ。そこはご理解頂きたい。

そして願うべきことは終わることではなく、果てしなく続くこ
となのだ。

そんなことを考えていた。甘いクッキーを飲み込みながら。

陽は天高く上っていた。次の町、もしくは村まではあと僅かな
距離しか残されていない。

かといって、この小さなオアシスでいつまでも休んでいるわけ
にはいかなかった。陽が落ちた砂漠の気温は急激に低くなり、光源
も一瞬にして皆無となるため、歩行は困難となる。

「ソラ。そろそろ行くぞ……って」

「わ、わ、ちべたっ！ ……ダイチさーんっ。この水、冷たくてす
つごく気持ちいいよー。飲むだけじゃもったいないくらいだよーっ」

ワンピースの裾をももまでたくし上げ、泉の浅瀬ではしゃぐソ
ラ。動いたびに小さな飛沫が上がり、きらきらと光が反射していた。
「わっ」

こけた。

「ううー……。びしょぬれだよー……。わわっ。……ダイチさんどうして水かけののかなーっ？」

「おまえが遅いからだ。さっさと出発するぞ……って、うわっ、冷てっ！」

俺がしたのと同じように、ソラは泉の水をばしゃばしゃとかけときやがった。

「あははっ。お返しだよー。うりゃ、うりゃっ」

「うわ、おい、や、やめろって！ 地図とか駄目になるから！ いやマジで本当に濡れるとヤバイんだって、ぐあああああああああ！」

「わ、ダイチさんがキレた」

「もー知るか！ ソラ、このまま遭難しちまっても知らねえからな。覚悟しとけよ！」

「うんっ、だいじょーぶだよー！」

「よし。……『よし』じゃねええええ！」

「『よし』じゃないんだ……」

「とつとと行くぞ。遊びでやっている旅じゃないんだ。こんな所で油を売っている暇はない」

「……………」

俺が言うと、ソラは表情を変えた。寂しげに眉をひそめ、瞳を潤ませ、頬を僅かに紅潮させ、上目遣いに俺を見つめている。

ぐあ。

い、いや騙されないぞ、俺は。女の子が大きな瞳を潤ませながら、俺を見つめて何かをねだってきたとしても、俺の意志は揺るぐことなどありえない。むしろ反抗心さえ覚えるほどだ。詮無い駄々に付き合っていられるほど俺の心は広くもなく、その時間もないのだ。よって。

ばっしやーっ！

「わわっ。ちべたっ」

盛大に水を浴びせてやった。全身全霊をかけた渾身の一撃をぶっかけてやった。

遊びたかったわけではない。いつまでもここで遊び続けていようとするソラに苛立ち、制裁を加えてやったただけだ。嫌と言うほど冷水を浴びせ、ソラから『遊んでいたい』という欲求を完全に消失させるために、単にじゃれあっているだけのように見えるこの行為に及んだまでだ。

俺が水を掬えば、ソラもまた小さな手のひらいっぱい水に濡れる。その手を振り上げると透明な液体が宙を舞う。無数に飛散する水滴は、その一つ一つに命が宿されているかのように光を放っていた。そして小さな命達は二人の肌に触れ、はつきりとその存在を感じさせる。

「えへへ」

ソラは笑う。水に濡れた髪をかきあげることもしせず、俺のことを見つめながら。

舞い踊る小さな粒子は、しばらくの間辺りを飛び交い続けた。

「わ、すごいねダイチさん。ボク、こんなにたくさんの人を見るの、初めてかもしれない」

「ああ、まさかここまで栄えているとは……」

そこは町で、市場だった。

前に立ち寄った村の者によるとカミヤの町は小規模で、村といつても差し支えないほどに廃れているとのことだった。

しかし、偉そうに口髭をたんまり蓄え自らの知識をひけらかすように語っていた偉大なる村長殿は、とんだホラ吹きじじいだったらしい。

目の前に見えるのは当に黒山の人だかり。

久しく他の人間との関わりを断ち、なるべく小さな町村ばかりを巡ってきた俺にとっては、少なくともここは充分な人混みと言えた。

今や、世界の人口は著しく減少しているというのに不思議な町である。

「うわー、ダイチさんっ。あれ、すっごくおいしそうだよー」

ソラが嬉々とした表情で指を差す先には、市場の出店のひとつ。

それは威勢のいいオヤジが営むパン屋だった。

「……」

蜂蜜のかかったパンケーキと俺の顔を交互に見つめるソラ。今にも指をくわえてよだれを垂らし出しそうだ。

「何だ、食べたいのか」

「……えっ？ わわ、いや、そんなことないよっ？ ボク、大人だから、蜂蜜がたっぷりかかったあまーいパンケーキがすっごく食べたいから、ダイチさん買ってくれないかなー……なんて、思ったことないよっ」

「そうか。ならいいんだが」

「うん、そうだよ。………わっ、ダイチさん、ほんとに通リ過ぎちゃう」

俺は歩き出し、店の前を通り過ぎるも、ソラはパンケーキの方に目を向け続けている。

「お嬢ちゃん、これサービスだ」

見兼ねたオヤジが甘そうなパンケーキを差し出していた。

「え！ わ、ありがとーっ！ いただきますっ。………んぐんぐ。…

…おいしー！ すごくおいしいよ、これっ」

「そうかそうか！ そりゃあよかった」

「うん！ すごくよかったよー」

蜂蜜を口元につけて、満足げに笑うソラ。その表情を見てオヤジも上機嫌のようだった。

だが、俺にはひとつの懸案事項が発生していた。

「お代は」

懐から財布を取り出して尋ねる。

「いやいや、いいってことよ。お嬢ちゃんの元気に免じてサービスだぜっ」

「おじさんありがとー」喜びの声を上げるソラ。

「いや、そんなわけにはいかないだろ。どちらにせよ買っていた」

「いやいやいやいや。こっちこそ、んなわけにやあいかねえよ。なにしろ俺の溜飲が下がらねえ」

「………そうか」

気分次第でこうも簡単に商品をばら撒いていいのだろうか。と、小さなパン屋の行く末を案じてしまいながらも、無料で貰うことを受け入れる。

だがしかし。俺の内心は安堵に満ち満ちていた。

俺が懐から取り出さんとしていた財布。その小さな布袋の中には一銭も入っていないかったのである。もしも、目の前で笑顔を絶やさぬ気のいいおっさんが豹変し、

「てめえ、俺のパン食っという金払わねえってのかくるあ！ かつ

たいフランスパンでめえの頭力チ割って、飛び出た脳しようで新たなおいしいパンを作っちまうぞくるあああああ！」

などと言われてしまったらどうしようと思い、心の中でぶるぶる震えていたのだが、このオヤジが心優しくて本当によかった。

「なあ、もしかしてあんたら旅人か？」

「ああ、そうだが」

「おお、ほんとにそうなのか！　ならこれも持っていってくれ！」

オヤジはおもむろにフランスパンを取り出した。俺は、頭をぶん殴られてその脳しようでおいしいパンを製造されてしまうのかと想像したが、それは邪推だったらしい。オヤジは長いそのパンを差し出しているだけだ。

「いや遠慮しておく。旅人なんざしょっちゅう来るだろ。逐一相手していたらもたないんじゃないか？」

「んなこたあねえよ。最後に旅人を見たのがいつだったかもわからねえ」

「あ？　じゃあ、この市場にいる客は……」

「みんな顔見知りだ。全員、村の人間だな」

辺りを見渡す。人、ヒト、ひと。これらが全て村人？

「馬鹿を言うな。一人くらいよそ者が居たっていいだろ」

「いいや、こいつらみんなカミヤの者だ。順番に名前を言ってやるうか？　あその米屋の客がリュウヤで、その連れの女がリン、その向こうにいる奴は……」

「いや、もういい」

全くおかしい町である。それにこの数の人間の名を全て暗誦できるだど？　全く馬鹿げている。

町の外から見る限り、カミヤの町はある程度の面積を誇っているように思われた。

そしてこの市場ほどではないにしろ、人口にしてかなりの数になるだろう。一介の市場に町民の全てが集まるわけではあるまい。

勿論、数千の人間を記憶することなど不可能であるので、この

おっさんは自らの顔の広さを誇張して喋っているだけなのだろう、と結論付けておくことにする。

「ところで、この町の長は何処にいる？」

「町長つてことか？」

「ああ」

「この町にはそんなもんいねえよ」

町長がいない。ごく小規模かつ共産的な農村においては長を設けないこともある。対外的な政策を必要とせず、急事には数人の男連中が顔を寄せ合い議論し、対策、方針等を決定する。それは古代から為されてきた基本的なムラの形だ。

しかしカミヤのような大規模な町において、全体を統括する人物が存在しないのは珍しい。

数本の小枝を手で握るのは容易だが、それが数百本単位となると余程の大男でない限り不可能だろう。例えば往年のスター格闘家や、どこぞの惑星の巨人族だとかがそれに当てはまる。

だが、そんな奴らが身近に存在するはずもなく、近所で有名なでぶガキやら、若い頃はラグビーで腕を鳴らしていたことを自称する親戚のおっさん辺りが関の山だ。

よって、小枝をまとめるロープが必要となってくる。その紐は頑強であり、柔軟であり、一本であることが要求される。

でなければ小枝はバラバラに散らばり、ロープは絡まって解けなくなってしまうからだ。

なのに。この町には長がいないと言う。

「で、てめえは何の用があつて町長なんかを」

「仕事をしたくてな。その許可がほしい」

「そうか。それなら……あの人だ。イズミさんを頼ればいい」

「イズミさん……」

「ああ。上月イズミさんだ。あの人に訊きゃあ大抵のことは教えてくれる。そしてなにより……」

「何より？」

「すっげえ美人だ」

「そっぴやてめえ、歳はいくつだ？」

イズミさんとやらのいる場所へ向かう道すがら、市場の人混みも抜け切らぬ頃、おっさんが尋ねた。

俺は自分の年齢を遜色なく答えた。

「そっか俺とタメか」

.....。

空気が固まる。周囲の喧騒も、今の俺の耳には全く入ってこなかった。ソラまでもが心底驚いたという表情で固まっている。

おっさんは気にせず続けた。

「いやあそっかそっか。俺よりちょい下くらいかと思っっていたんだが、まさか同じ年とはな」

おっさんは平気な顔で笑っている。口髭の奥から覗くいやに白い歯が光って見えた。

「.....待ってくれ」

「ん？ 何だ若さの秘訣が知りたいのか。それは.....恋をすることだぜ」

「うるせえよ！ おまえ、ちょい下どころの話じゃないだろ、二桁単位で俺の方が下のはずだ！」

「はっはっはっ。何だおまえ下の毛も生えてねえのか、なら仕方ねえな」

「言ってねえよ、生えてるよ！ おまえが老け過ぎなんだよ、ずつと心の中で『おっさん』と呼んでいたよ、俺は！」

「光栄だ」

「その余裕はどこから！？ 貫禄ありすぎだから。それより店は？ あんな店、この若さじゃ手に入らないだろ？」

市場の端にあった随分と立派な店構え。この年齢で自分の店を持つのは容易なことではないだろう。

「あいつは父親の形見だ。……さつさと逝っちまいがってな。俺がまだガキだったころの話だ。大変だったんだぜ？ 包丁もろくに扱えねえままパン焼いて、掛け算もままならないときに客商売してたんだからよ」

自嘲気味に笑う。その太く低い声は喧騒の中にもはつきり耳に届いた。

「ま、昔のことなんかどうでもいいんだけどな。俺は今が楽しくて仕方ないんだ。客はみんないい奴らだし、そいつら相手に馬鹿な話をしていれば笑ってられる。それでも一番楽しいことがあってな……」

「一番楽しいこと？」ソラが問う。

「毎晩の金勘定さ」

「結局それかよ……」

そう言い放つおっさんは、ここ一番の満面の笑みである。パン屋というものはこんなにも儲かるものなのだろうか。ワンチャンスやつてみるのも悪くないかも知れない。

「ま、何にせよ、笑っていられりゃ十分だった。……ところで」

立ち止まる。気が付けば市場は末端を迎えていたようで、これまでのかまびすしさは既に消えていた。そして同年齢だという新事実への驚きも薄れてしまっていた。

振り返れば先程の雑踏を再度見受けることもできるのだろう。

が、先程までは物珍しかった人ごみにも、今は飽き飽きしていたところなので、前を向いていることにした。

おっさん——同い年に対してこの呼び方もどうかと思うが——は続ける。

「ひとつ忘れていたことがあるんだけど……」

「何だ、金儲けの方法でも伝授してくれるのか？ なら聞いてやらないこともないぞ、手数料は一銭もやれないがな」

自分で言っていてなんだか悲しくなってくる。そして今晚の宿の

ことを慮ると、更に虚しさまで覚えてしまう。

「違うって。名前だよ、名前」

「名前？」突然出てきた単語に面食らう。

「聞いてなかっただろ、名前。俺は、今井コウジ」

おっさん——もとい、コウジはそう言いながら右手をこちらに差し出した。

「……」

この手は何なのだろうか、お金が欲しいのだろうか。

「金は無いつてのに」

「何でそうなる！ 名前、そいで握手！ 常識だろ。そっちの嬢ちゃんの方が余程しっかりしてんじゃねえのか？」

「そうだよ、ダイチさん。自己紹介くらいできなきゃ大人になれないよ？ ——ボクの名前はソラ、だよ。コウジさん」

ソラはぺこりとお辞儀をした。そしてその頭を……コウジの右手の上に乘せた。

「……」固まるコウジ。

「……」そして90度に曲げられた腰を動かそうとしないソラ。奇妙なオブジェと化している二人。

一人が手を差し出し、一人がその上に額を置く。そして黙りこくる。まさにこの状態を握手と呼ぶ——ワケがなかった。

「何やってんの、おまえら」

俺も思わず突っ込んでしまう。この状態を握手と呼ぶのは、いかかわしい宗教団体が未開のジャングルに生きる怪しい民族くらいのものだろう。もっとも、正しい方法は俺にも分からないのだが。

「え、えっ？ なんかボク、ヘンなことしてるかなっ？ あくしゅってこうするんじゃないのっ？」

「違うだろ」……多分。

「……なら、てめえやってみろよ。正しい握手ってモンを」

コウジは半ば呆れ気味になっている。早々に手を打たなければコウジの怒りが頂点に達し、

「てめえ、とつとと握手しろやくるあ！　まるでパン生地をこねるかのようにてめえの肉体こねくり倒し、イイ感じに醗酵させておいしいパンを焼いちまうぞくるあああああ！」

などと叫びだしてしまいかもしれない。それは非常に困る。何より命が危ない。

「……ダイチだ」

俺は手を握った。堅く厚く優しく温かく大きな手のひらだった。「なんだよ分かってんじゃねえか、だったら最初からやれつての。ま、よろしくな」

「よろしく頼む」

「うんっ、よろしく、だよ」

「はい。よろしく願います」

四人は手を合わせ、その体温を確かめ合った。そして笑いあった。俺の旅の目的へ、また一つ近づいた。

違和感。気に留めず、この身の全てを流るる風に任せてしまえば、それを異質なものと認識する前に歩き出していたことだろう。だが俺にはそれが出来なかった。自由にこの世界を飛び回ることができなかった。両の翼を広げ、大空から美しすぎるこの世界を見つめることができなかったのだ。

「さて、行きましようか」

だから、俺は言う。

「……って、誰だおまえっ！」

いつの間にやら存在していた四人目の人物。

「……はい？」

「いつからそこにいた」

「今ですけど」

「何ゆえに俺たちと握手をしている」

「なぜでしょう？　私にも分かりません」

爽やかな声でそう言い微笑むは一人の女性。瞳が大きく整った顔付き。長い黒髪は三つ編みにし、胸の前に下ろしている。美しき女

神、というものを具現化したならば丁度このような造形になるであらう。そのくらいに綺麗な容姿をしていた。

「イズミさん。何やってんすか、こんなところで」コウジが声を上げる。

「あら、ごめんなさいコウジさん。驚かせちゃいましたか？ ちょうどあなた方が私を訪ねてきそうな頃合いだったので、先に待たせていただいたのですが……」

「いえいえっ、全然いいんすよ。俺はイズミさんに会えただけでしあわせっすから」

「そうですか。うれしいです」

「いやあ今日も本当にステキっす、イズミさん」

「ありがとうございます」

不意に現れたこの女性。コウジの言うところの『すっげえ美人』であることは間違いないが、町ひとつを治めている者とは到底思えなかった。

何より若く、そして細い。俺がこれまでに訪れてきた土地の長はどれも、髭を生やした老人か恰幅の良い男と決まっていたからだ。「申し遅れました。私、このカミヤの町長代理を務めさせていただきます。上月イズミというものです。よろしく願いいたします」

「あ、ああ。よろしく頼む」

丁寧な挨拶につられ、辞儀などをしてしまう。

「よろしくねっ、イズミさん」

ソラが笑顔で言う。その様子にイズミも微笑む。

「かわいい旅人さんたちですね、ようこそカミヤへ」

「かわいい、という形容詞は俺にも係っているのだろうか。」

「今日はどういった用件でこの町へ？ 行商ですか？」

「少し違うが、まあ商売だな。それと、話を聞きに来た」

「話ですか」

「ああ、そうだろ？ ソラ」

「うん、お話いっぱい聞きたい」

「そうですか……」

ソラが言うと、イズミは思案顔になる。

「でしたら、私の家へ行きましょう。甘いお菓子も用意していますよ」

お菓子という単語にソラが反応したのを俺は見逃していなかった。

落ち着いた部屋。そんな印象を受ける部屋だった。派手な装飾や華美な家具もない。最低限生活が送れるだけの家具や日用品が置いてあるだけだった。

——大量の本を除いては。

乱雑に積み上げられた本の山。それでいて似たようなタイトルの本が、固まって置かれている。もしかしたら、本人にのみ理解可能な配置の仕方なのかもしれない。

——諸国の政と歴。カモノハシの生態。けんちゃんの簡単お料理レシピ。特殊及び一般相対性理論の相違。現代倫理学。どうさんとあひるさん——その種類は多岐に渡る。

イズミは、小規模な図書館くらいは簡単に始められそうな本の海の中、俺たちを椅子に座らせた。籐椅子に座したイズミの細く長い指は、ももの上でしなやかに組まれ、神経質そうに一定のリズムを刻んでいた。ゆっくりとしたその拍子は、時計のないこの部屋と調和しているようだった。

「——この町、カミヤは人の数こそ少ないですが、とても明るい町なんです。市場は通って来ましたよね？ 聞いているとは思いますが、あれは全て村人なのです。行商人も観光客も居ません。」

「ああ、大都市並みの人混みだった。カミヤの面積は知らないが、人口はかなりのものになるんじゃないのか？ あまり謙遜しなくていいぞ」

「謙遜ではありませんよ。あの方達が町人のすべてなのですから」

「すべて……？」

「ええ。今の時間、この町の人間のすべてが市場に集まっています。老若男女問わず、すべての人たちが、です」

市場は一本道に展開されていた。思えば距離にしてみると、そう長くはなかったかもしれない。人の量の所為で錯覚を起こしていたのだ。

しかし、理解できない。

「なぜこんなことを」

「世界の終わり。——このことは知っていますよね？」

「ああ。昔、世界は一度終わっていた、とかいう話だろ。詳しくは知らないがな」

「それで十分です。……どうぞこちらへ」

イズミは立ち上がり、俺たち三人を促す。

ソラはカステラを手に持ったまま跳ねるように腰を上げていた。ただひとつ存在している本の山の切れ目。その先には窓があった。

そこから見える風景。

「なんだよ、これは……」

世界の終わり。それは遠い昔の出来事で、歴史に疎い俺には、全く以って縁のない事柄だった。あまりにも遠く、知ることのできない世界は、今を生きる俺の中に少しも介在してこなかったのだ。

しかし、それが今、ここにあることを知った。

「どうです？　これが世界の残骸です」

巨大な建物が乱立していた。競うように階数を多くし、その高さを誇っていた。ネオンが灯り、町を照らしていた。人々はビルの隙間を縫うように歩き、流れ行く時をその身に感じていた。

そのはずだった。

高層建造物が建っていたであろうその空間には、何もなかった。その場所が栄えていたことを窺わせる痕跡が残っているだけ。その痕は、焼け跡とも水害の跡とも異なる。

その部分は、終わっていた。

この世界に一体何が起きたのか。

それは誰にも分からない。

分かることは、それが起きた、という事実だけ。

「あの辺りには、高さにして333mの塔があったそうです」

イズミは窓枠に手を置き、形の良い目を陽の光に照らし出した。
訥々と、それでいて抑揚のついた口調で話し出す。

「その塔からは様々な電波が発信されていました。それは、トウキョウ砂漠のすべてを補えるほどの力があつたそうです。高度な文明を思い知らされるようですね」

信じられない。333mもの高さの塔が存在するなど、まるで御伽噺の世界のようだ。

「その向こうには海がありました。今では砂漠のずっと先に行かないと見ることは出来ませんが、終わる前の世界において、日本は小さな島国だったそうです。しかし、それらはすべて『世界の終わり』によって無きものとされました。……誰も実証することのできない世界など、おとぎ話とそう大差ありませんから」

顔の向きはそのまま自嘲気味に微笑むイズミ。陰影のついたその姿は、妖しい魅力を放っていた。

「……でも、私はこの風景を残しておきたいのです。どれだけ凄惨であろうと、どれだけ悲哀であろうと、私たちは、この町の名残を見つめ続けなければならぬのです」

目を細める。

紛失でもなければ消滅でもない。人間によるものなのか、自然的なものなのか、そんなことは知る由もない。人々はそれを調べることさえしなかった。目を背けていた。

『世界の終わり』

ただひとつ。単純な事実のみを脳裏に焼き付けたまま。

小さな町に、悲しみの残滓を置き去りにしたまま。

「常に悲しみと対峙していることは、とても辛いことです。だから、

せめて普段は明るく日々を生きよう、笑って過ごそう。そう決意したのです。この町で、この町の人々とともに」

「そうか。それで……」

「ええ。町と人。それら二つは、共生すべき大切なつながりです。

……人が町を愛せば、町も人を無下にはしません。ですから、町を信じることにしたのです」

市場の開かれる午前。そんな短い間でも、この町を愛する時間が欲しい。人々はそれを願い、実行している。

貧しくなろうと、苦しみうと、人々はそれを望んだのだ。

世界から取り残された、この町の人々は。

「——さて」ぱん、とイズミは手を打ち鳴らした。「しんみりした話はこれでおしまいです。お菓子はまだありますから、ごゆっくりしていただくさいね」

イズミは相好を崩し、これ以上ない笑みを浮かべる。

すると、ソラは「わーい」とかいうありがちな喜びの声を上げて飛び跳ね瞳をきらきらさせて笑う、と思ったのだが。しばらく待ってもその声は聴こえてこない。

「——。——」

小さな声が、隣から聴こえた。沈んだ声。

「——よ」

「……ソラ？」

ソラは虚ろな瞳で窓の外を見つめていた。まるで『世界の終わり』そのものを目の当たりにしているかのようなようだった。手に持っていたカステラが、音も立てずにぽとりと落ちた。

うわ言のように発せられる言葉は聞き取ることができない。感情のこもっていないその声は、俺の心を薄暗い闇の底に落とした。奇妙な浮遊感に襲われる。

突如として訪れたその感覚は、不安。

何か大切なものを失くしてしまった時のような、不安。

「……ソラ？ ソラっ」

何かを口にし、声にしていなければ、闇の底から這い上がれなくなる。

焦点の合わない目。だらりと垂れた両手、指先。うわ言は止み、代わりに小さな吐息が漏れている。名を呼ぶ声に反応は無い。

必死にもがく。名を呼び続ける。何が起きたのなんて理解できるはずも無かった。考えている暇も無かった。なんでも良い、笑って欲しかった。遥か彼方に臨む空を目指して、腕を伸ばし、空を掴む。乾いた空気が指先をかすめる。

遠い。あまりにも空は遠く離れている。

ひと筋の涙が白い頬を伝い、木の床に染みをつくった。ソラは表情の無いままに涙を流していた。生気の失せた瞳は涙で滲んでいた。染みは増えていく。ぼんやりと開かれた口からは、何も発せられていなかった。泣き声ひとつ、聴こえてこなかった。

肩を揺すつても、頬を軽く叩いてみても、反応は無かった。そこには、俺が憧れた強さの力ケラもなく、今にも壊れてしまいそうなほどに脆かった。

まるで人形のようなだった。一切の感情を持たない人形のようなだった。

——崩れ落ちた。音も無いままに。

本のページがめくれ、カステラがつぶれ、こぼれた紅茶は白い紙に染み、甘い匂いが鼻腔をついた。とてつもない吐き気がした。ぐるぐると目が回る。暗闇に取り込まれそうになり、目を見開いた。

晴れすぎた空は場違いに明るく、頬に流れる涙をきらきらと反射させていた。細い手足はいつにも増して幼く見え、白い肌はいつにも増して透き通って見えた。細く柔らかそうな髪は縦横無尽に散らばり、不可思議で美しい紋様のようなものを形成していた。

他には何も見えなかった。そんなことを考えていた。

暗い闇は閉ざされた。

夢
2

暗い。怖い。見えない。寒い。痛い。苦しい。重い。つらい。

怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。

怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。

怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。

負の感情ばかりが溢れ出る。目の前の暗闇が、ボクの心を楽し
い気分になどさせてくれるはずなど無かった。苦しみの波が押し寄
せてくるだけだった。

でも歩いた。

つらかった。狂ってしまいそうだった。死んでしまいたかった。

だから歩いた。なんだかボクにもよく分からない。でも歩いた。

— 光が、見えた。

突然だった。驚いている暇などなく、それに向かって必死に歩いた。

光を手に入れば、どこまでも歩いていけるような気がした。どんなに暗い闇でも乗り越えられるような気がした。

でも、それはしあわせなこと？

歩き続けたいの。

立ち止まりたいの。

ボクはどちらを選びたいのだろう？

どちらを選ぶべきなのだ

ろっ？

光は手の届くところにある。ゆっくりとボクを誘っている。柔らかな暖かさが伝わり、負の感情が和らぐ。手のひらを閉じて、その光を包みたくなる。

それは、永遠に辛い旅を続けることを意味していた。

抜け出すことも出来ずに終わった世界を彷徨い続けるのだ。

しかし。差し伸べたこの腕を引き、歩くことを止めてしまえば、つらいことはなくなる。楽になれる。

変わりに少しの孤独と後悔を背負うだけ。それだけ。

「きみはどっちがいい？ おしえてほしいな」

ボクは言った。どうしてボクは、自分のことがこんなにわからないのか。人に教わらないと、何も出来ないのか。

歩けばいいのか、立ち止まればいいのか。何がほしいのか、いらないのか。何に笑って、泣けばいいのか。そもそも涙はどうしたら流れるのか。

「おしえてほしい。きかせてほしい」

この声は世界に響いたのだろうか。

——光が瞬いた。弱く、儚げに。今にも消えてしまいそうな光は、それでも瞬いた。世界にその存在を知らせた。ここにいる、とボクにはその瞬きが、笑ったように見えた。

光は、ボクの手の中に吸い込まれてゆき、収まった。苦痛は無かった。暖かさを感じられた。

歩いていくこと——つらいこと。

立ち止まること——楽なこと。

その答えは明白なのに、ボクはつらい方を選んだ。

よくわからない。自分の気持ちが理解できない。

一歩踏み出す。硬い地面が足の裏に刺さる。少しの痛みを感じる。涙が出そうになる。

でも歩いた。

続かないと意味が無いから。立ち止まってしまえばそれで終わりだから。でも続けていれば、その先にきっと何かが待っているから。旅の終わりは必ず来るから。旅の途中どんなに辛いことや悲

しいことがあっても、それを乗り越えれば未来が迎えてくれるから。
笑顔になれるから。

歩いた。歩いた。

たった一つの光を手にして、暗闇を少しずつ照らし出しながら。
「まっけてね。かならず、いくから」

静かな夜だった。

眠る者の妨げとなる騒音や明滅、あるいは恐怖や焦燥、またそれに類する事象は全くもって存在せず、小さな寢息だけが聞こえる夜だった。

そんな夜には仕事がはかどる。陽が落ちて他にすべきことが見つからないが故、なのだろうか。闇夜には、値段の張るロウソクを消費するだけの価値がある。

俺は机に向かって筆を走らせていた。とっておきの原稿だ。天下のロウソク殿も、俺の素晴らしい文章に使用され、さぞ報われることだろう。

——俺は一定のリズムを刻む寢息をBGMにそんなことを考えていた。

「……ん。ダイチさん……？」

背後から小さな声が聴こえた。

「気が付いたか、ソラ」

「うん。ふあ……」

ベッドに半身を起こし、小さく欠伸をして目を擦るソラ。

「もう少し休んでいていいんだぞ。つらくはないか？」

「ううん、だいじょうぶだよ」

「そうか」

——イズミの部屋で、俺は気を失った。

立ったまま、目を開けたまま、俺の意識は別な場所へと飛んでいた。イズミとコウジが何を話しかけても、強く体を揺すっても反応が無かったという。その姿はまるで「人形」のようだった、と。後々目が覚めてから、その言い草は無いだろう、と反駁しかけたが、俺自身そうでなかったという確固たる自覚も無く、役立たずの木偶同然であった可能性も否定は出来ないので黙っておいた。

——そして放心していた俺は、ついに木目の上に倒れた。俺は倒れているソラの手の上に、自身の手のひらを被せた状態で崩れ落ちた。

コウジは慌てふためいた。

イズミは冷静沈着だった。

俺とソラはカミヤ唯一の医者と呼ば診られても、どこにも異常らしきものは見つからず、死んだように気を失っていた。

しかし「気を失っていた」というよりも「眠っていた」という方が表現として適当かもしれない。

なぜなら夢を見ていたのだ、不思議な夢だ、悲しく儚げな夢だ。――夜の砂漠を一人で歩き、その終わりなき旅路を嘆く――内容としてはそんな単純なものだった。

そのような不可思議な夢を見たのは初めてのことだった。内容のことを言っているのではない。

あまりにも、現実味を帯びていたのだ。

明確な恐怖、寒気、孤独。そして苦痛。

夢ではなく現実のことだとしても力説されれば、信じてしまうことは容易いであろう。

リアリティに満ちた夢だった。あれは一体なんだったのだろうか。予知夢か。それともデジャヴユか。

「ダイチさん……？」

「……ん？」見ると、ソラが心配そうな顔でこちらを見つめていた。「どうした、ソラ。俺の顔になんかついてるか？　なんだカピカピに乾いたご飯粒かそうかだったら舐めてもいいぞ」

僅かに顰められた眉に悲壮さを感じたので、俺はおどけてしまう。「違うよ。……ダイチさんが思いつめたような顔してたから」

「……そうか？」

「うん、そうだよ……イタッ」

不意に声を上げ、顔をしかめる。俺は動揺した。

「どうしたっ。痛むのか……どこだ？　脚か？」

「う、うん、ぜんぜんだいじょーぶ。だいじょーぶ、だよ……？」
そう言って笑うソラの笑顔は、明らかな作り笑이었다。つらい事を隠している痛々しい笑이었다。服の上から抑え付けられた脚の状態は計り知ることが出来ない。

ソラは自分に言い聞かせるかのように、

「う、うん、だいじょーぶだよ。だからダイチさんはぜんぜん心配しなくていいよ。きつとどこかにぶつただけ。すぐになおるよ……」

引きつった笑顔。「そうか、ならよかった」で済ませられる筈がない。引き下がったとしてもおびたらしいほどの後悔ばかりが残り、今後いつまでも悩み考え続けてしまうだろう。

だから俺は言った。俺の心が平静であると、なるべく伝わるようにゆつくりと。

「脚、見せてみる。きつと腫れてる」

「だ、だいじょーぶだってば、ダイチさん。ボクはだいじょーぶだから」

そう繰り返し、拒む。涙を溜めた瞳で「だいじょーぶ」と繰り返す。

その言葉は、少女を余計に弱々しく見せるだけだった。

「いいから見せてみる。もしかしたら医者を呼ぶ必要があるかもしれない」

自分でも、何が「いいから」なのか、分からない。頑なに同じ言葉を反復し、拒絶する少女を押し退けてまで、世話を焼く必要は無いのかもしれない。だが、衝動を抑え切れなかった。自分自身理解できない、胸の奥底から沸き起こる、奇妙な好奇心にも似た衝動を自制することが出来ないのだ。

「心配するな。大丈夫なら、大丈夫なりにそれを確かめさせてくれでないと、俺が安心できない」

「……」ソラは黙って俯き、脚を手で抑えている。

「悪いようにはしない。なんだったら、医者も呼ばないと約束する。」

痛い注射も、苦い薬も無しだ。これならいいだろ？」

俺の言葉に少女は小さく首を振った。揺れる髪の影響が、鮮やかに壁へ映る。ロウソクの火が揺れ、移る少女の影を淡くさせた。幻想的な光景だった。

「……ダイチさん。ちがうの、そうじゃないの。ボクが怖いのはイタいのでも、お医者さんでもなくて、ダイチさんなんだよ。……うんっ。えっと……そうじゃなくて、ダイチさんから、笑顔が消えるのが怖いんだよ。ダイチさんはボクのことを心配すればするほど、笑えなくなっちゃう、よね……？　だから、ボクのことなんか気にしないで……」

ソラは俯く。既に僅かな作り笑いさえも消えていた。

「……夢を、見るんだよ」

呟くような、消え入りそうな声。静かな夜には、そんな弱々しい声でも耳にはつきり届いてくる。いつそ耳を塞いでしまいたかった。「すつごく悲しい夢。とつても……つらい夢。暗い闇の中を一人で歩いてる夢。周りには誰もいなくて、声も聴こえなくて、手のひらの温かさも感じられなくて、寒くて、月も星も花もなくて、どうしたらいいかわからなくて、ひたすら歩いて、悲しくてつらくて怖くて……。それでも涙は流れないの。泣きたいのに、どうしても涙の流し方がわからないの」

窓から差し込む月明かりは柔らかく、白い頬を優しく照らし出していた。風の無い、しめやかな夜だった。闇には光があり、光にもまた闇があり、互いを美しく照らし出している。調和の取れた世界からは、何の憂いも感じられなかった。

——残酷なまでに。

「暗闇の中を歩いてるとね、だんだん脚が重くなってくるの。脚が錆びちゃったみたいに、動かなくなってくるの。それでもずっと歩いてた。でも——いやになってきて……うう」

悲痛に満ちた表情でうずくまる。そして顔を上げた。瞳は潤み、涙のダムは今にも決壊しそうだ。

それでも、ソラは泣いてはいなかった。

力強い目で、俺を見つめ返した。

「でもね。ダイチさんは心配しなくていいの。しょせん夢のお話だから、想像のお話だから。……だから、ダイチさんには、笑っていいほしいな」

滔々と、小さな口から発せられる言葉の一つ一つが、矢のように胸へ深々と突き刺さる。鋭い矢はけっして抜くことが出来ない。

それでも俺は、出来ることを探した。例えば傷を塞ぐこと、もしくは癒すこと。

俺は一介の旅芸人だ。医者でもなければ魔法使いでもない。知識も無ければ教養も無い。止血の方法も、人工呼吸の正しいやり方も、折れた骨の固定の仕方も、何一つ分からない。心の癒し方など、少しも解っちゃいない。そもそも、本当に正しい方法などあるのだろうか。すべての人間に当て嵌められる解答など存在するのだろうか。解らなかった。この世界には、解らないことが多すぎるのだ。

だがしかしやはりそれでも、俺にだって出来ることはあるはずだ。解らなければ、知ればいい。答えを求めればいい。

「ソラ。おまえの言いたいことは理解した。……でもな、それは少し違う。俺はおまえに対して情けや哀れみを抱いたことは一度も無い。ましてや一緒に泣いてやろう、なんてことは死んでも思っていない。——俺は、俺がやりたいようにやっているだけだ。だから、おまえの痛む脚を癒してやりたいのだって、俺の欲を満たすために他ならないんだ。同情でも憐憫でもなく、純粹に。——そうすることとで、俺は笑っていられる。悔いの残った気持ちのままじゃ、素直に笑えないだろ？」

「……うん」

俺の言葉にソラは小さく頷いた。影が僅かに揺れた。

「いいよ、ダイチさん。——でも、絶対に笑顔を忘れちゃダメ、だよ。絶対に」

「ああ、約束する」

ソラは俺の言葉に微笑んだ。そしてベッドの上で両足を伸ばす。イズミのお下がりであろうパジャマの裾をたくし上げ、肌が露出した。

「……」

その脚は折れてしまいそうなほど細く、白かった。繊細で儚げなその肢は、雪の結晶を想わせた。

意外なことに、外傷は一切見受けられなかった。惨たらしい痣や傷を想像していたのだが、それは杞憂だったらしい。痛みは肌の内側にあるようだった。

腕を伸ばし、その肢に触れた。子供特有の肌の弾力により、僅かに指が押し戻される。しかし骨張った肢の滑らかさは、嫌でもその細さと弱々しさを連想させた。

「……っ」不意にソラが言葉ともつかぬ声を上げた。

「悪い、痛むか？」

「……」

ふるふると小さく首を横に振る。表情は明らかに痛みに歪んでいた。

ふと、疑問が湧き上がる。こんなことをしていて意味はあるのだろうか。ソラに苦痛を負わせながら、怖がらせながら、こうして肌に触れていることに。

いや、違う。意味などないのだ。この行動は何の意味も含まれていない。幼く小さな存在を確かめることが出来るなら、肢に触れる、というこの行動にこだわる必要などないのだ。

ただここに——そのことを確かめ合いたいだけなのだ。

尚も手のひらをソラの肢に這わせてゆく。どんな幻でも、触れていさえすれば、それは現実のものとなる。そのことを信じて。

「ダイチさん……っ」

俺の名を呼ぶ声。

「こわい、こわいよ。ダイチさん……。ねえ、ダイチさん。ボク、眠りたくないよ。夢なんか見たくない。ずっとこのままでいたい。」

ずっとこうしてダイチさんの傍にいたいよ……」

消え入りそうな声。その言葉に、俺は何も返してやることが出来なくて。

ただ、震える少女を抱きしめてやることくらいしか出来なくて。

「……ずっと、一緒にいて、ね？」

互いの体温を確かめ合いながら眠りに就いた。

朝である。清々しき黎明の時間だ。燦々と太陽が照り付け始め、形成される影は徐々に短くなってゆく。

窓の外を見る。町は未だ起き出していないようだ。小鳥のさえずりさえ聴こえない。

「……ふああ……ふう」

大きく欠伸をひとつ。乾いた空気が気管を通り、肺を満たす。ついでに背伸びをしてみると、昨日までの歩行による筋肉痛が心地よく襲ってきた。

この上ない極上の朝である。

ベッドの上の寝息を素通りし、部屋を出た。階下に降りると、朝食の下ごしらえにいそしむイズミの背中が目に入る。

「おはようございます、ダイチさん」

俺が声をかけようとしたその瞬間、イズミが狙い済ましたように振り返り、にこやかな微笑みとともに挨拶をした。

「おう、早いんだな」

「ええ、元来、女性より男性よりも早く起き、あたたかい朝食の支度をするもの。それが常識であり、伝統でもありますから」屈託なく笑う。

「ま、例外が上階にいるんだがな。いい寝顔してるよ」

「ふふふ、ソラさんですね。でもお子さんはいいいんですよ。今の時期に睡眠時間をたっぷり取らせて上げないと、育つものも育たなくなってしまうから。ところでダイチさん、昨晚はよく眠れましたか？」

「ああ、おかげさまでな。しかし……」

安らかに寝息を立てている少女。ソラのことである。先程の様子では、脚の痛みは治まっているように見えた。だがしかし、あの状態では、いつ何時症状が現われるかも分からない。ましてや外傷も

見受けられず、原因も不明ときているので俺では対処の仕様が
ないのだ。

一晩の睡眠で完治したとは考えにくい。やはり、俺があいつの傍
にいてやるべきなのだろうか……。

「おはよつ。ダイチさんつ、イズミさんつ」

元氣溢れる声が耳に響いた。振り返るとそこには小さな人影。だ
ばだばのパジャマを袖もまくらずにだらりと着ている。まさに服に
着られているといった印象の少女。

「おはようございます、ソラさん。朝から元氣いっぱいですね」

「うんつ。ボクは一日で朝が一番好きなんだよー」

「ふふつ、私も朝は好きですよ。何より、静かですから」

「あははっ、ボクもそう思うよ」

「どこが静かな朝だ、どこが」

「むっ、ダメだよダイチさん。ちゃんと朝の挨拶はしたの、かな？」

満面の笑みを湛えたまま、首を45度に傾げる。なぜだか俺はこ
の仕草と表情に弱い。

「し、していないが……」

氣まずそうに言うと、ソラはぶんむくれた。

「だめだよつ、あいさつはしっかりしなくちゃ。すべてはあいさつ
に始まり、あいさつに終わるの。わかるかな？」

「ああ……」

「よし、じゃあやってみよー」片手を振り上げて促すソラ。

「お、おはよう……」

「うーん、元氣が足りない。もっとはきはきつと、しゃきしゃきつ
と、だよ」

「おはようございますっ！ ソラ様、本日も良きお姿でございます
っ。こうしてソラ様のお顔を拝見できたことは、不肖のわが身、こ
の上ない幸せでありますっ！」

「わ……すごい、ダイチさん。完璧だよ……」

本当に完璧だったのであろうか、甚だ疑問である。やりすぎた感

が否めないのだが。

「この調子だよ。明日の朝も今みたいによろしくね。ボクもダイチさんを見習わなくっちゃ」

「……」ぐあ。翌朝も先のわけの分からないハイテンション挨拶をかまさなくてはならないのか。そしてソラに完全に悪影響を与えてしまっている気がする。

イズミのフォローを期待したが、微笑みを絶やさずに食器を並べていただけだった。くそ、絶対に楽しんでやる。

ならばいっそ、パン屋を営む老け顔オヤジことコウジは、実はカミヤの町を裏で牛耳る悪の大王であり、村人の垢を毎日徴税してはそれを材料としてパンを製造し、それを売りさばいては多額の利益を上げていて、ソラが昨日食したパンケーキにも、可哀想な村人の垢がたっぷりと使われているんだ——などという大嘘をソラの無垢な脳内に叩き込み、村中に触れ込ませてやるうか。そしてコウジを失脚させて、ダンボールをマイホームと呼称する人にさせてやるうか。どうだ参ったか。

などというけつたいな想像を膨らませてみたものの、あのおっさんが破産したところでイズミが困るわけでもないし、特に意味もないだろうと思ってやめた。よくまあ、俺の頭の中はこんなにも実りのない妄想を膨らませられるものである。

「あつ、何かすっごくいいにおいがするよつ。なにかな、このにおい」

ひよこひよこと良い香りの根源である台所方面へ歩いていくソラ。鼻までひくつかせている。今にも四つ足になって、尻尾をぶんぶんと振りまわし出しそうだ。

そして思い当たる。

「ソラ、脚はもう大丈夫なのか？」

細かく動き回る細い脚。白い肌は窓から差す光に眩しく輝きを放っているように見える。

「あし？ なんのことかな」

首を傾げる。その意識は未だ鍋やフライパンの中身に向けられているようだっただ。

「昨日の夜、痛がっていただろ。今は、治まったのか？」

「うんっ、ぜんぜんだいじょーぶだよ」朗々と言い放つ。

「そうか、ならいいんだが……」

「イズミさん、今日の朝ごはんはなにな。ボク、早く食べたい」

「はいはい、もう少しで出来ますから、待ってて下さいね。ちなみにメニューは……ないしよです」

「うー、いじわるイズミさん……。でも、こんないいにおいしてるんだから、きつとおいしに決まってるよねっ。ね、ダイチさんっ」

ソラは何の憂いもなく脚を動かしている。昨夜、あれだけ痛みを訴えていたというのに、今では全くその兆候は見られない。むしろ砂漠を歩いていたときよりもスムーズに動いているようにも見える。

眠りに堕ちる前に見たソラの悲しげな表情は、すべて俺の見た夢だったのだろうか。溜まりきった疲労が度を越し、あらぬ幻想を見ていただけかもしれない。

もしくは、脚が痛むというのは、夜間だけのことも考えられる。暗闇の中で悪夢を見続けているときにだけ、その症状は現われるのではないだろうか。

いや、現にこうしてちょこまかと走り回っているのだ。何を疑問に思い、憂うことがあるうか。

「……ダイチさん？」

ソラの顔が目の前にあった。

「……ん？ あ、ああ、そうだな」

「だよね、そう思うよねっ。あははっ、すっごく楽しみだよー」

満面の笑みだ。落ち着きなくステップを踏み、木の床を踏み鳴らしている。とととんっ、と小気味良いリズムを刻み、調理を進めるイズミを催促しているようだっただ。

「ソラ、もうパジャマは着替えたらどうです？ 女の子がそんな格好をしているのははしたないですよ？ ましてや殿方の前に出るの

であれば、もつと身だしなみに気を配らないと」

イズミがソラに注意した。言葉遣いに違いこそあれ、その姿はまるで母親のようだった。実際の母というものに対する記憶は一切ないが、どこかそんな気がした。

「イズミさん、お母さんみたいなこと言う。ボク、本当のお母さんのことは覚えてないけど、イズミさんみたいな優しい人だったら、きつとあたたかくて楽しい家族になると思うな。……あ、そしたらダイチさんがお父さんだねっ」

「なんだ、不服か」

「ううんっ、そんなことないよ、すつごくお似合い。じゃ、ボク着替えてくるね」

悪戯っぽい笑みを残してソラは二階へと駆けて行った。辺りにはイズミの手馴れたフライパン捌きの音だけが響いている。

「家族、ですか……。ソラも良いこと言いますね」

「ああ、何にも考えていないような顔してな」

「ダイチさんはどう思います？」準備を終えたのか、イズミは両手をエプロンの裾で拭きつつ歩み寄ってくる。

「なにがだ」

「私のような人が……」ゆつくりと歩いてくる。長い黒髪がさらさらと揺れ、微かに妖艶な芳香が鼻腔をくすぐる。そして上目遣いに、

「……奥さんだったら」

ぐはあっ。

顔が近い。吐息が感じられる。破壊力がありすぎる。い、いや別に惚れているわけではなくてだな、こんな美人にこんな言葉を聞かされたなら、誰しも顔が赤くなってしまうのは当然のことであって……。

「……」

人影が目に見え込んできた。

その人物は焦点の合わない目を見開き、大口を開けている大男である。開け放たれたドアを背にして仁王立ちするその姿は、何か

得体の知れない異形の怪物を目の当たりにしているかのように茫然自失としていた。

「……………」その顔色が徐々に青く、白くなっていく。

「……どこから見ていた」俺は問う。

「私のような人が……のあたり」

ピンポイントッ！ いやまあ、あの場面から見られていたのなら、妙な誤解を抱かれても仕方がないといったところか。いやしかし待ってくれ違うんだそんな絶望的な表情を浮かべるな今から俺が弁解するからそう焦るなよ、な？

「…………い、いや、いいんだ」俺が必死な思いで弁解の言葉を模索していたとき、絶望の大男ことコウジはもごごと口を開いた。「う、薄々は感じてたんだ。ダイチ、てめえは顔も結構整ってるし、女受けするキザな性格してるしよ。イズミさんの結婚相手としてはうってつけだよ…………」

「いや違うから。昨日出会ったばかりだから」

「そうか、これから愛を深めていくのか…………」

もはや何を言っても無駄なようである。俺はこの男の絶望が、じきに怒りや殺意へと変貌を遂げるのではないかと類推し、戦々恐々としていた。心ここにあらずのコウジはぶつぶつと何やら呟いている。

「コウジさん」イズミが静かに名を呼んだ。

「……何スカ」コウジはぶっきらぼうに答える。

「私はコウジさんのことも大好きですよ？　ですから、そう気を落とさずにいてください」

「マジっスカ！」

「はい、勿論です。仲良くやっていきましょう。何事も笑顔が一番ですから。……そうだっ。コウジさん、朝食を一緒にするのはどうです？　我ながら美味しく出来たと思うんですが…………」

「はいっ！　もちろん、そのつもりで来ましたからっ。いただいていきますっ！」

突如として目の輝きを取り戻すコウジ。現金なものである。

しかしイズミのセリフから察するに、コウジのことは本命ではないことが窺えてしまうわけだが、その点は承知しているのだろうか。甚だ疑問である。

食卓の席に着くとソラが階段を下りてきた。薄手のワンピース姿である。長い髪は無造作に、束ねて結わえる気配さえ感じられない。

「あらためておはようっ。イズミさんっ、ダイチさんっ」

「おう」俺は片手を挙げて応じる。

「おはようございます。あらあら、ソラ、寝癖が全然直ってないですよ」

どこからともなく取り出した櫛で、せっせとソラの長い髪を整える。

「えへへ」

なすがままの少女はだらしない笑みを浮かべ、イズミに体を預けている。本当に仲の良い母娘のようだった。

「あのさ……」俺の隣に腰掛けているコウジが口を開く。「俺、嬢ちゃんに挨拶されていないんだけど。イズミさんとめえはしつかりされてんの……」

「ま、影薄いからな」

「それにしてもだぜ？ この至近距離にいて気付かないってこたあないだろ」

「眼中に無いんじゃないの？ あと、影薄いつてのは否定しないのな」

「くっ、なら俺の方から挨拶してやる。……って、嬢ちゃん、今すっげえ幸せそうな顔してて、声かけにくいんだが……」

ソラの長い髪を梳かすのには時間がかかるらしく、イズミはまだその黒髪に櫛を通し終わっていないかった。その間ソラは始終、気持ちのよさそうな笑顔を保ち、意識は完全にどこかへ旅立っていた。

「お、おーい、嬢ちゃん……」

「えへへー」

「お、おはようございまーす……」

「えへへへへー」

「だめだ……。俺の手に余る強敵だ……」

挫折していた。この男、デカイのは体だけらしい。そこで俺はひとつの作戦を、可哀相なひげ大男に提示してやることにした。何と心の優しい一般人なのであるうか、俺は。

「おまえの店のパンでも持ってきたらどうだ？ 甘いもんなら、ソラの気を引くことができるかもしれないぞ」

「おおつ。そうか、甘いものかつ。そりゃあ名案だぜ！ これからめえをコーメーと呼ぶことにしよう」

やめてくれ。

「ゲンナイでもいいぞ」

「さっさと取りに行けよ」

「おうつ、すぐ戻るからなつ。俺の分の朝飯もとっておけよ！」

そう言い残し、コウジは自宅のパン屋へと走って行った。希薄な存在感を少しでも向上させるためとはいえ、殊勝な奴である。

「ふうー。ありがとね、イズミさん。すつごく気持ちよかったよ。

……あれ。コウジさんは？ さっきまでそこにいたよね？」

ソラがもつともな疑問を口にした。やはり気付くよな、普通。

「どこにいったのかな」

「帰った」

「そつか、なら仕方ないね。イズミさん、ボクおなか空いちゃったよ」

「はいはい、もう準備は出来ていますから、いただきますうか」

「やったー。わ、すつごくおいしそうだよ」

「おまえ『すつごく』以外の形容詞を知らないのかよ。そればかり使っていないか？」

「うー。……く、口癖なんだから仕方ないんだよつ」

「もぐもぐ……これ、すつご……じゃなくてええと、お、おいしい

よー」

事実、イズミの料理は、ソラの言うところのすつごくおいしいものであった。朝食として手軽に作ったものとは思えない上質の食事である。

旅の途中にありつける食事は、乾燥肉や硬いパンなど、到底美味とはいえないものが主だ。辿り着いた街の料理屋での食事は、この上ない贅沢であり至福であるのだが、イズミの料理——程よく焼かれたベーコン、半熟に炒られた卵、柔らかいパン、新鮮な牛乳など簡素に見えて様々な工夫が施されているのであろうもの——は料理屋のそれさえ凌駕する極上の食事だった。

「うまいな」

思わず口に出る。一瞬、自分が発したものと理解できないほどに、無意識に出た言葉だった。

「ありがとうございます」イズミが返事をする。

「イズミさんって……」

「はい？ 何です、ソラ」

「すつごく大人っぽいよね」

「そうですか？ ありがとうございます」

「うん、そうだよ。いつも落ち着いてて、背も高くて、頭も良くて、きれいで。……む、むねもおつきいし……」

ぺたぺたと無い胸を触る。そしてイズミの胸元をじっと見つめる。

「ありがとうございます。でも、年齢としてはダイチさんと同じくらいなんですよ」

「何っ！」「これには俺が反応した。「マジでか」

「ええ。私はコウジさんと同い年ですから」

驚きを隠せない。イズミが老けているというわけではない。むしろ少女のような容姿をしている。しかし明らかに俺より年上の空気をイズミは纏っているのだ。

俺とイズミとコウジが同い年だったとは予想も出来ない新事実である。だがしかしそれでも、コウジとイズミが同じ時を生きてき

たというのは信じ難い。この町は時空が歪んでいるのだろうか。

「どうしたらイズミさんみたいに大人っぽくなれるのかな。ボク、知りたい」

「大人っぽく、ですか……」イズミは顎に手を当て、思案顔をする。

「特に気をつけているところ、というものは無いのですが、強いて言えば……そうだつ、言葉遣いを改めてみるのはどうです？」

「ことばづかい」ソラは棒読みで復唱する。

「ええ、言葉遣いです。丁寧に、相手を敬い尊ぶ心を持つてお話をすれば、きっと大人びて見えますよ。落ち着いて、ゆっくりと美しい言葉を紡いでゆくのです」

「うんつ、やってみるよ。……ねえ、ダイチさん」

「んあ？ 何だ」付き合つてやることにする。

「おはようございます、です。ダイチ……さま」

「……」

「ほ、ほんじつはおひがらもよく、ぜつここの、おせんたくびよりでございます……ですわね。ボク……じゃなくて、わたくしはこのようなお天気の日、おそとに出ておしゃべりしたり、走りまわったり、おなかいっぱいあまいものを食べたりするのが大好きなのでございますことよ、ダイチさま」

「気色悪いぞ」

「うわあああああああああつ。きしょくわるいって言われたあああああああつ。……うう、イズミさあん、ダメだったよ」

ソラは涙ぐんだ瞳でイズミの胸へ跳びつく。その頭をイズミは優しく撫でながら言う。

「うーん。やはり突然の変化というものには、誰しも驚きや違和感を覚えてしまうものなのでしょうか……」

「うう。じゃ、ボクはどうすればいいのかな。このままじゃ、ボクはダイチさんから気色悪がられながら過ごすことになっちゃうよ……」

「……」

「あとは……色気、でしょうか」

「いろけ」ソラは棒読みで復唱する。

「ええ。色気です。女性の特権である艶やかさを妖しさで殿方を誘惑し、メロメロにさせてしまうのです。そうしたら、あとはこちらのもんです。女性の虜となった殿方は無力も同然、思い通りにやりたい放題です。あ、エロスとも言います」

「う、うん、なんかむずしそうだけどやってみるよつ。……ねえ、ダイチさんダイチさん」

「んあ？ どうした。なんだピーマンが食べられないのかそうか仕方無い奴だな、でもな緑黄色野菜は体に良いんだからしっかり食べないと駄目だぞ、大きくなれないぞ」

「ちがうよ。ボクそんなに子供じゃないからピーマンくらい食べれるもん」

「そうか」

「そうだよ……ねえ、ダイチさん」

「今度は何だ」

ソラは奇妙なポーズをとっていた。両脇を締め、前傾姿勢をとり、こちらに顔を近づけている。本来、一般成人女性に同様の姿勢を取られたならば、鎖骨の下部に形成された二つの膨らみによる、谷間という名のエルドラドが垣間見えてしまい、俺はとてつもなく目のやり場に困っていたことであろう。そして顔を赤らめたりもしていたであろう。

しかし悲しいかな、無いものはどう努力しても無いのである。

零の二乗は零のままなのである。

俺の目の前には断崖絶壁しか存在していなかった。

「ううー……」

姿勢に無理があるのだろつ。ソラは子犬の如き唸り声を上げていた。色気とは程遠い。

しかし心優しい俺は、そんな不憫な少女に言ってやった。

「……セクシーだな」

「ほんとにつ？　ボク、うれしい」

「そりゃあよかったな」

「うんっ、それでね、ダイチさん」

「なんだ」

「ボクと……しない？」

今度はもじもじと体をよじりながら、頬を赤らめて上目遣いに訊いてきた。なにやらろくでもない提案がぶつとんでくる予感である。「なにをだ。なんだあやとりかそうか悪いが俺は不器用なもんでそういった遊びは苦手なんだがおまえがそこまで言うなら仕方が無いここはあやとり三番勝負と洒落込もうじゃないか。まずは俺の番な

……」

「ううー、ぜんぜんちがうよ」

「なにをしたいんだ？」

「……え、えっちいこと、だよ」

「……あ？」

「だから……え、えっちいこと、だよ」

「あぁっ？」

「……な、なんでもないよ」

すぐごと引き下がるソラ。少々やり過ぎたかも知れないが、教育的指導としてはこれが適切であろう。いやむしろこの対応以外は考えられない。万が一、甘んじて受け入れてしまった日には俺は一気に変態へと成り下がる。もしもソラのような幼い少女に対して不埒な行為に走れば、俺はどこかの団体に捉えられてしまうことは確実だ。そんなことは絶対にあつてはならない。――まあ最初からソラとそのような関係になりたいなどとは思ってもいないので、特に問題は無いであろう。

「うわあああああああああ。冷たい目でにらまれてあしらわれたあああああああ。イズミさんっ、ダイチさんに乙女心をもてあそばれたよぉっ」

「うーん、よしよし。こんなにも可愛い娘の誘いを無下にするなん

て、ダイチさんはとんだ甲斐性なしですね……」

「いやいやいや……」

「とんだかいしょーなしだよっ」

「妙な言葉を教えるなよ……」

そんな間の抜けたやり取りを交わしている間にも、食卓に並べられている料理は着々とその量を減らしていった。そして時間は、流れゆく雲のように緩やかに流れていく。

食事が終わり、俺とソラは膨らんだ腹を持って余しながら椅子に腰掛け、イズミは流し台で皿洗いにいそしんでいた頃。

ボタンツ！ 玄関扉が勢いよく開き、

「嬢ちゃんっ」コウジが息を切らして入ってきた。

「あ、おはよ、コウジさん。どうしたのかな、そんなに急いで」

「パンだ」

「ぱん？」

「そうだ、パンだ。嬢ちゃん、これ好きだろう？ メロンパンにクリームパン、あんぱん、チョココロンネ。俺特製のかぼちゃプリン練乳クリームメロンあんパンなんてのもあるぞっ」

両手いっぱい抱えられた自家製パンの数々。今にも零れ落ちそうなほど、山盛りに積まれている。

「さあ、食ってくれ。おうおう、お代は気にすんな。ぜんぶ俺のおごりだからよッ」

「……」ソラは複雑な表情を浮かべ、甘ったるそうなパンの山を見つめている。「……コウジさん」

「ん？ どうした」

「……ボク、おなかいっぱいなんだよ」

「おう、それで？」

「うん、えっとね、そのパンいらない……」

「おう、そうかそうか……って、なにii」

ひっくり返りかけながら叫ぶ哀れなパン屋の主人。そこで俺は言

ってやる。

「うまかったぞ、イズミさんの朝食。おまえの分はないけど」

「えええええええええええええええええッ」

「コウジは、こちらが耳を塞ぎなくなるほどの大声で叫ぶ。相当なシヨックだったのであろうか。」

「おいダイチ！ おまえ、パンがあれば嬢ちゃんの気を引けるって言うってただろ！」

「そうだったか？」

「ああそうだよ！ 確かにおまえは言っていたよ！ そして、どうして俺の分の朝食、イズミさんの手料理が残ってないんだっ」

「そりゃあ、来るのが遅かったからだろ」

「パンを焼いてたんだよ。今日は休みだったから一から作ったんだぞ。これだけのパンを焼くのにどれだけの労力と時間を費やすか、おまえは知ってんのかっ」

「知るか」

「くそおおおおおお！ おまえ少しは考えても見ろよ、パン焼きの苦労をよ！ これだから最近の若者は……」

「同じ年だからな」

「うつせえよ！ なんだよ、俺が悪いってのかよ、なら謝ってやるよ、ごめんなさいでしたああああああああああっ」

なぜか謝られてしまった。

「次からは気をつけろよ」

「だからうつせえよ！」

「こらこら、おふたりさん。ケンカはよくないですよ」

イズミがエプロンで手を拭きつつこちらに歩み寄ってきた。

「聞いてくれよイズミさん。こいつがよう……」コウジは抱えたパンをぼろぼろと取り落としながらしゅんとして俯く。

「あらあら、そうなんですか。よしよし、かわいそうですねー。がんばりましたねー」幼い子供をあやすかのように頭を撫でる。

「イズミさん、朝ごはんは本当に残ってないんスカ……？」

「はい、残ってないです。てつきり帰ってしまったのかと……」

「おまえはパンでも食ってるよ」

「くっそおおおおおおおっ！　まあ、パンうめえからいいけどよ！」

そう言うなりコウジは、自らの抱えていたパンを馬鹿のように食い始めた。しかし喉に詰まったらしく、胸の辺りを叩き出して呻き声を上げている。その様子を見たイズミが水を持ってきて、コウジは受け取るなりぐびっと飲み干した。

「あざっす、イズミさんっ」

そして晴れやかな笑顔を心優しき家主に向けた。全く世話の無いやつである。

旅をする上での収入源は、俺の場合ただ一つと言っている。それは俺の旅の目的に即した有益な仕事であり、金も稼ぐことが出来るという最高の稼業であった。

ビジネスとしてもローリスク・ハイリターンなもので、賢明な投資家ならば真っ先に手を出すようなことなのである。何しろ元手がかからない。それ故に赤字の可能性はゼロパーセントなのだ。

だがしかし、黒字の確率が常に変動している。それは100かもしれないし、0かもしれないし、ゼロかもしれないし、零かもしれない。

こうしてゼロを繰り返されれば不安に思う御仁もいるだろうが、絶対に損をすることの無い株だとも考えてくれればよろしい。経営破綻の可能性は皆無なのだ。俺の食い扶持さえ確保されていれば、少し出てくるぞ」俺は立ち上がる。

「わ、ダイチさんどこ行くのかな」

「仕事だ」

「わ、ダイチさん仕事あったんだ」

「当たり前だ。人を無職の浮浪者扱いするな。——仕事をしないと

金が稼げないからな。金がないと旅を続けることもできない」

「わ、それは大変だよ。頑張ってお仕事しなくちゃ。ダイチさんはどんなお仕事してるのかな。ボク、知りたい」

「……ま、ついて来れば分かるだろ」

……………。

昨日は人で溢れかえっていたはずだった。その通りには荒涼とした風が吹き、殺伐さえ感じさせるほどのどうしようもない寂しさとわびしさが漂っていた。晴れた青空が、俺の心の孤独感をさらに増幅させ、強い陽射しは温度による汗とともに別な意味での嫌な汗を体中から搾り出さんとするかのようだった。

そこには誰もいなかった。

今日は市場全体が休業しているのだろう。どこの店からも客引きの声は聞こえてこなかった。

「ねえ、ダイチさん。ここでお仕事するのかな」

「ああ、そうなるな」

「ひと、誰もいないけど」

「……………」

商売というものは客が存在しなければ成立しないのは、全ての稼業において共通する規定事項である。多分にもれず、俺の仕事というものも客あつての商売だ。他人の介在なしで儲けることが出来るビジネスなどというものがあるとしたら、今ごろ市場なんてものは消え失せている。

「少し待ってみるか。今の時間帯は朝食休みでもしているのかもしれない。しばらくすればきっと客も集まるだろ」

集まらなかった。

待てど暮らせど、人影は見えなかった。影どころか、声も気配も感じられない。町人全員が神隠しにでもあつたのであろうか。本気で心配になってきた。

「来ないね……」ソラが退屈そうに呟く。

「ああ、来ないな」

「ひとがいないと、お仕事、できないんだよね」

「まあ、そうだな」

「でも、ひと、いるよ」

「どこに」

「ここ」

「だからどこに……」

見ると、そこには自らを指差すソラの姿。天使もかくやというほどの笑みをたたえ、存在をアピールしていた。

「仕方ない、やるか」

「やったー」飛び跳ねるソラ。「どんなこと、するのかな」

「落語だ」

「らくご」ソラは棒読みで復唱する。まるで意味が分かっていないようだった。

「噺をして、人を笑わせるんだ。ときにはためになる噺や悲しい噺もあるが、終わったときにはみんなが笑顔になってる。そんな仕事だ」

「そうなんだ。ダイチさんにぴったりのお仕事のような気がするよ」俺は深呼吸をする。噺を始める前には、必ず呼吸を整え、心を落ち着かせ、そして喋りだすのが俺なりの作法だった。

地面に正座する。服の裾を整える。ソラも俺に習って脚を畳んだ。

座布団も無ければ、着物でもなかった。しかしそれでも構わない。何しろ俺の師匠もそんなものは持ち合わせていなかったし、噺は外見でするものでもないからだ。

咳払いをひとつ。

俺は口を開いた。

話し終えると、「わー」という小さな歓声とともに小さな拍手が待っていた。

たった一人分だが、俺にとっては何百もの声と拍手のように聞こえ、ハネ太鼓の鳴り響く中、沢山の笑顔が見えていた。それだけ俺の気分が高揚していたのかもしれない。実に心地よかった。燦々と照る陽射しの熱など気にならなかった。焼くような陽の熱が、喋っている俺の精神をさらに昂ぶらせていた。

ソラは時に声を上げて笑い、時に感心するように何度も頷いた。食い入るように俺の目を見つめ、終始離さなかった。

「すつつつごくおもしろかったよー」

俺が感想を求める前に、笑顔でそう言った。しかしこいつの「すつつく」はあまりあてにならないことは既に判明している。だが今は、その促音の多さと俺の気乗りの良さに免じて、都合よく解釈してやることにした。

「どうしたらそんなにおもしろいことが思いつくのかなっ」

「古典落語といってだな、遙か昔から存在している噺なんだ」

「そーなんだ。でもすつついよ。ものすつつく、すつついよっ！」

こいつの語彙の貧弱具合には呆れるが、褒められていることには変わらない。これほどまでの絶賛が待っていることは予想だにしていなかったため、自然と顔の筋肉が弛緩してしまう。確認する術はないが、さぞだらしの無い表情をしていたことであろう。

「まあ、俺なんかは駆け出しでな。まだまだ……」

「本当にまだまだだな」

声が聴こえた。腹に響くような低音。そして聞き慣れた、否、先刻聴いたばかりの声。

「てめえの落語は教えられた噺をただ真似してるだけだ。んなもん誰にだってできらあ。落語つつうのはな、文章を朗読するんでも、うめえ奴の物真似をするんでも、演技をするんでもねえ。そいつになるんだよ。出てくる人物そのものに成るんだよ。与太郎だったら与太郎、熊五郎だったら熊五郎。ちまちまと妙な工夫を入れんじや

ねえよ、入り込むんだよ、感じるんだよ」

見覚えのある髭面が、嘲った笑みを浮かべ、腕を組み壁のもたれで立っていた。自家製のパンをたらふく食したのである。その腹は、心なしか膨らんでいるように見えた。

「てめえの噺で笑うのは、人のいい嬢ちゃんくらいのもんだ」

「コウジ、おまえ……！」

「待てよ、別に嬢ちゃんの悪口を言ってるわけじゃねえんだ。ダイチ、単にてめえが下手糞なだけなんだよ。てめえはその落語で、今まで稼いでこれたのか？」

「……」

「んな甘えた落語で、人様を笑わせることが出来たのか？ 甚だ疑問だな」

言い返す言葉を、俺は持ち合わせていなかった。

事実、これまで、落語での儲けは微々たるものであった。俺の噺を聞き、笑い、金を置いていくものなどは皆無に近かった。

哀れな乞食を見るような視線で見下し、小銭をばら撒くような者もいた。悔しさと怒りを噛み殺しながら、泥に汚れた金を拾い集めた。理不尽に暴力を振るう者もいた。血の味を舌の上で感じながら、嘲笑を聴いていた。いや、それらは理不尽ではなかったのかもしれない。

俺の噺が面白くなかったから。つまらなかったから。

それだけで十分だ。全ては俺の未熟さと愚かさによるもので、客を責めるなど見当違いも甚だしい愚行だったのだ。つまらない芸を見、ましてや金を払わされるなど、客にとってはそれこそが理不尽だったのではないか。

今までそれに気付かなかった俺は一体何なのだ。

されば、

「おまえは、出来るというのか？ 俺よりも上手く、落語を」
「できる」

即答され、面喰らう。御託ばかりを並べ立てる奴というのは、転

じて自らのこととなると、急速に勢いを無くすくらいがあるものだ。しかしコウジの表情に欺瞞や過剰な自信などの感情は見受けられなかった。柔らかな風が吹き、さわりと髪が揺れた。

コウジはおもむろに座り込み、わざとらしく咳払いをした。

隣に立つソラは、俺たちの険悪な雰囲気も諸共せず、ニコニコと微笑みを浮かべ、コウジが口を開いて話し出すのを待ち望んでいた。

コウジの落語は、流れ行く大気の如く、違和感無く耳へと滑り込んできた。噺の初めの幾秒の内に、力の差をまざまざと見せ付けられるようだった。その有様は、後頭部を殴打されたような衝撃でもあり、広大な闇の中に独り取り残されたような絶望でもあり、雲の上を自由に飛翔しているような奇妙な浮遊感でもあった。しかしそれは便宜的にそのような比喻を使っているに過ぎず、この感情の起伏を言葉で表現するのには無理がある。だがただひとつ、確かなことがある。

俺は笑っていた。

どうしようもない敗北感や沈鬱な気持ちさえも押し退けて、笑いという至極単純な感情がせりあがっていた。

「どうだ？」噺を終え、礼をし、したり顔で俺を見て言った。

「すっごくおもしろかったよーっ」

代わりにソラが答えていた。心なしか、拍手の音が先程より大きくなっている気がした。

「ほらみる、嬢ちゃんだつてこう言ってる」

「いや、さっきも同じ感想言われたが」

「負け惜しみだな。てめえ思い切り笑ってたじゃねえか」度合いの増したどや顔を向けられる。うぜえ。

とはいえ、完敗だった。落語に勝ち負けがあるとは思えないが『どちらが上手く、面白いか』という落語の根幹の出来について問われたならば、コウジを選ぶことは間違いないであろう。

「てめえ、師は誰だ？」不意にコウジは訊いた。

「師などいない」

「あ？ いない？ てめえ、今までどうやって嘶を覚えてきたんだよ」

「独学だ。書物で学んだ。……何か問題でもあるのか？」

「おおありだ、馬鹿野郎っ！」 至近距離で怒鳴られる。

「なぜ」

「なぜ、じゃないっ」

「なぜ」

「なぜ、でもないっ。ダイチ、よく聴け。総じて習うということは、本を読めば済むという単純なことじゃなくて、人と人が、体温の通った言葉を通じて伝承していくものなんだ。特に落語はそれが特に当てはまる。師と仰ぐもの無しで、どうして嘶が上手くなる？ 達人になれる？ 名人になれる？ もちろん、真似をするだけでは意味が無いがな、独自の落語へ発展させていくのはそれからだ。文で読むつつののも悪いことじゃないが、まずは師から技を受け継いでからにしておけ。てめえの落語がつまらねえのはその所為なんだよ」

「うお、おまえ、今めちゃくちやまともなこと言ってるぞ」

「悪いかよっ。たまには俺も真面目なこというんだから、水差すなよ！ ……そこでだ」

にやりと口角を上げ、意味深な表情を浮かべる。このような表情を湛え、人に何かを提案しようとしている人間が妙なことを言い出さないはずが無い。

しかし、多少の覚悟をしていたにも拘らず、俺は「こいつ馬鹿か？ 馬鹿なのか？」と、思わずにはいられない提案をしてきやがった。

「俺の弟子になれ」

「わけがわからない」

「いや分かれよ、分かるだろ。てめえには器のでかい師匠が必要なんだよ、そして俺を慕えよ、敬えよ。……そもそもてめえにとって

デメリットは無いはずだ。嘶の技術を学べて、儲けも増えるんだからな。妙案じゃねえか」

「却下だ」俺は即座に言い放った。「おまえから何も学ぶ筋合いは無いだろ。鞆持ちも着物の整理もするつもりはない。——しかもコウジ、おまえを慕い敬えだど？ 虫酸が走るな」

「そう言うなって、ダイチ。俺が手取り足取り教えてやるからよ」
「気色悪いからな」

「てめえは筋がいい。きつと伸びるぜ。心配するな、俺の胸を頼れば絶対に上手くなる」

「だから気色悪いっての」

「なんだよ、いいじゃねえかよ、弟子入りしろって。……なあ、嬢ちゃん。嬢ちゃんは、どう思う？ ダイチが俺の弟子になってもかまわないだろ？」

何故かソラに是非を求める。いや待て、ここでこのお気楽少女に面白展開満載であろうこの問題を振ろうものなら、一秒で了承されるに決まって——

「ぜんぜんだいじょーぶだよー」

ぐあ。満面の笑みで許可を頂いてしまった。まるで、やつつけ仕事にも程がある役人の如き了承の早さである。

だがソラの了承を得たからといって、泣く泣くコウジに弟子入りを決めてしまうほど、俺はお人好しでもなければ馬鹿でもない。

「おい、ソラ。いいのか？ 俺が、こんな髭面の弟子になっても。想像してみる、この俺がコウジを師匠と呼び、へいこらと頭を下げながら身の回りの世話までするんだぜ？ 吐き気がするだろ？」

「……うーん、それはちよつといやかかもしれないよ」

余程、奇妙な図を想像したのか、僅かに眉根を寄せて首を傾げる。
「だろ？ ってなわけで……」

「でも」

俺が非許可の言葉を促そうとしたとき、ソラが遮った。

そして、原始の女神もかくあろうというほどの笑みを浮かべ、

元氣良く言い放った。

「すつごくおもしろそうだよーっ！」

大きな溜息を吐くというリアクション以外の反応の仕方を俺は持ち合わせていなかった。

「そうと決まれば前座名だ。てめえはどんな名がいい？　ちなみに亭号は『神谷亭』な」

「突然言われてもな……」

結局、屈辱的なことに『神谷亭興治』のもとへ弟子入りする羽目になってしまった。これにより、本当に嘯が上達し、金を稼げるようにまでなるのであるうか。まことに疑問である。

俺たちは、殺伐とした炎天下の通りから逃れ、イズミ宅へと舞い戻り、テーブルを囲んでいた。

俺の座る向かい側にはひげ師匠ことコウジが座り、隣には脚をパタパタさせながらオレンジジュースをすするソラが座し、斜め向かいには訳知り顔で微笑むイズミが頼杖をついていた。

俺が黙っていると、コウジが切り出した。

「決めらんねえか？　なら俺がつけてやる。てめえの名は……神谷亭クロマティ」

「やめてくれ。ってか、その名前、絶対落語家じゃないよな。強打者の匂いがプンプンするんだが」

「いいじゃねえか、打つぜ、めっちゃめっちゃ打つぜ。守備は弱いがめっちゃめっちゃ打つぜ」

「いや意味わかんないから」

「いやか？　それなら……神谷亭カミヤティ」

「なぜ繰り返す……」

「なんかかつこいいだろ？　学名っぽくて」

どこから突っ込めばよいのだろうか。とりあえず、同じ言葉を繰り返せば学名になる、という考えを改めさせるべきか、それとも前

座名を学名っぽくする意味はどこにあるのかを問いたさすべきなのか……。

「神谷亭笑大さん、というのはいかがでしょう？」

声が聞こえた。穏やかな声調で、新たな名が告げられた。

「すつごくいい名前だよー」ソラが幼児のお遊戯の如く大袈裟な動きで手を振り上げる。

「うおつ。めちゃくちゃいいじゃないっすか！ こいつにやるには勿体無いくらいっすよ！」コウジが身を乗り出す。

しかし、疑問に思う。

「おいおい、どうしてイズミが決めるんだよ。この件に関しては無関係だし、第一、前座名は師匠がつけるものなんじゃないのか？」

「はい、その点に関しては問題ありませんよ？ コウジさんに落語を教えたのは、私ですから」

これには驚きを隠せるはずもない。言葉に詰まっていると、コウジが言う。

「言ってなかったか？ てつきり既に知ってるもんだとばかり思ってたぜ。しかし、わかるようなもんだろ、俺はイズミさんに対して敬語だし」

そのような僅かなヒントで答えが導き出せるはずは無いだろう。敬語をつかう理由は、単にイズミの姉御肌による所からだとはかり思っていたくらいだ。

「ですが、教えていたといっても、昔のことなんですよ？ 私はもう引退していますから。それゆえ、師匠と呼ばれることもありません」

「そうか」

「前座名、どうします？ 神谷亭ギャラクシーさんでよかったですか？」

「変わってるからな……」

「すみません、神谷亭エターナルフォースさんでしたね」

「いや違うから、笑大でいいから」

「そうでしたね。よろしく願いします、笑大さん」イズミはにっこりと笑った。

「これからめえは俺の弟子だぜ！ 分かってんのか、え？ 笑大よお！」どこぞのチンピラのような立ち振る舞いを見せるこの男が、よもや噺家として弟子を取るまでの大物になっているとは、誰にも想像できないであろう。もっとも、その弟子である俺自身がこの事実を受け入れられていないのだから仕方あるまい。

「おめでとー、ダイチさん……じゃなくて笑大さんっ」ソラがしくじりながらもその名を呼ぶが、何がおめでたいのかは不明である。

「ソラ、おまえは元の呼び名でいいからな」

「え？ どうして？」

「おまえがつけた名前だろ。だったら、その名前のままでいい」

「うん、そうするよ、ダイチさん」

ダイチ。

神谷亭笑大。

俺には二つの名前がある。

これまで一つとして持っていなかった自分の名前。忌み嫌い、嫌悪していた名前という存在。一生、その存在をコンプレックスに似た重圧として背負っていくものとはかり思っていた。

だがしかし、その思い込みが簡単に消化され、喜びへと消化していくことになるうとは思ってもみなかった。

名前は永久にその形を変えず、存在を失わないものだ。一度付けられた名前は、どんなものであるうと、その存在を証明しうる手がかりとなり、答えとなる。人々の記憶にその名があり続ける限り、安らかなときの中で、二つの名前は永遠に残り続けるのである。俺はそんなことを願いながら、笑っていた。

時間は無為に過ぎていく。

無賃で食料と部屋を提供してくれているイズミに少しでも貢献

するため、様々な家事——皿洗い、洗濯、掃除、少しばかりの料理など、買い物と料理以外の考えうる全ての日常生活を円滑に運営するための仕事の手伝い——をソラと二人でこなしている内に、辺りは浅い宵闇につつまれつつある、一日の中で最も幻想的に町並みが彩られてゆく時刻となっていた。

自らの家庭も持つているであろうコウジ——もとい師匠は自宅へと戻っていた。パンを焼いたり、落語をやったり、イズミに惚れたりと忙しい奴である——もとい、御忙しい御方で御座います。

「笑大さーんっ。夕食の準備ができましたよーっ。降りてきてくださいねーっ」

イズミから次々と課せられてゆく一日の家事に奔走し、ぐったりと二階の部屋で寝そべっていたところ、穏やかな美声が下階から耳に入ってきた。体を起こす。背伸びをしながら欠伸を一つすると、日々の疲れがどつと溢れ出るように自己主張をし始めた。しかし夕食、しかもイズミ嬢の呼び出しとあらば、そう待たせるわけにもいくまい。俺は足早に階段を駆け下りた。

「おそいよ、ダイチさんっ」

そこにいたのは豊満な美女ではなく、幼児体系のお子様だった。

「うー。ボク、子供じゃないもんっ」ソラはぶんむくれて腰に手を当て、胸を張る。

「胸、無いだろ」

「あるよっ、触ってみてよっ」

「触るかっ。だからそこが子供なんだ。大人の女性は、もつと恥じらいを持っているんだ」

「はじらい」ソラは棒読みで復唱した。

「そうだ、恥じらいだ。——大人の女性であるイズミで試してみよう。おーい、イズミっ」

「はい、なんででしょうか？」夕食の準備を整えたイズミがふきんで手を拭き拭きこちらに歩み寄ってきた。

そして俺は、大人の女性であることを試す質問をぶつける。

「Hになればなるほど硬くなるものは何だ？」

「えっ。……えっと……」

頬を赤らめ、俯く。エプロンから伸びた細い脚は、控えめに内股気味となっている。両手は胸の前で忙しなく組みかえられていた。若干思春期の少女のような反応に思えてしまうが、そこは色っぽさでカバーしている。

（見る、あれが大人の反応だ）ソラに耳打ちする。

（う、うん、どうしてあんなに恥ずかしがるのか分からないけど、すつごく大人っぽい気がするよ）

必死に解答を模索するイズミ。そんな家主に俺は畳み掛けるようにこう言った。

「で？ 答えは？」

「……と、殿方の前では言えません」

流石はイズミ、完璧な答えである。

「さて、ソラ。おまえの解答はどうなった？」

「うんっ。ボクはわかってるよー」

自信満々に笑うソラ。得意げな表情には微塵の恥じらいも感じられない。

「答えは、えんぴつだよーっ」

「やっぱガキだろ、おまえ……」

期待通りの返答に俺は安心し、イズミは何故か納得したような表情。当のソラは腑に落ちないといった様子でありながらも、食卓に並んだ料理につられて席に着いた。

食卓にはとても三人分とは思えない料理の数々が並んでいた。普遍的な家庭料理の定番である煮物や焼き魚などが並ぶ一方、海老や蟹などの高級食材を使用した異国のフルコース、そして見たことも無いような奇妙な料理まで様々だ。これを贅を尽くしたと言わずに何と言おうか。

イズミの料理の腕にも感心するが、その財力の高さも尊敬に値するほどだ。

「いただきますっ」

ソラが手を合わせ、食事が始まる。

「どうです？ ソラ。お口に合いましたか？」

「うん、すっごくおいしいよー」

笑いあう二人を余所に、俺の頭の中には一つに疑問が渦巻いていた。

瑣末な問題と割り切ってしまうばそれまでなのだが、妙な違和感というものは食事の旨味さえもかき消してしまう者である。奥歯に挟まった異物は取れるまで中々に人をイラつかせるものなのだ。

ソラとイズミは、何と言うことは無い日常会話に花を咲かせていた。

その姿はどこからどうみても親子にしか見えない。言葉の行き来を楽しんでいる母と娘の姿だ。

しかしそのような関係性であるからこそ、口にしてはならない話題なども理解できているものだ。

例えば好きな異性の話、友人関係のもつれの話。親からすれば、仕事の不具合の話、夫婦関係の悶着の話などの類である。

ソラとイズミ、二人の関係はあまりにも浅すぎた。出逢ったばかりの二人には真の母娘のような暗黙の了解が出来上がっていないかった。もしくは、ソラが俺の想像以上に幼すぎ、世の中の条理を理解していなかったただけなのかもしれないが。

俺がイズミにぶつけられなかった質問を、ソラは小さな口から投げかけた。

「昼間、どうして町に誰も人がいなかったのかな」

微笑みながら、明日の天気の具合を尋ねることく、そんな疑問を口にした。

昨日、この町に着いたとき。

市場にはおびただしい数の人がいた。その誰もが両手いっぱい荷物——食材や日用品、その他諸々の商品の数々——を抱えていた。

コウジ曰く、その人間はカミヤの町民全てなのだという。市場が開かれる度、町に住む老若男女みな、買い物に興じるのだという。それが今日。落語の公演をしようと町に出ると、町人は打ち合わせたように家に籠って出て来なかった。

いくら市場が休みであろうとあからさまに不自然ではないか？ 晴れた日には子供の一人や二人、走り回っていて当然というものだろう。

「……」

リビングは、昼間の表通りのようにしんと静まり返っていた。視界の端に小さくカーテンが揺れているのが見えた。

イズミは少ばかり俯き加減で、焼き鮭の身をほぐしていた。きれいな曲線を描いていた切り身の面影は今や消えうせ、フレーク状になった身と、骨が皿の左右に分けられていた。

俯いているイズミの表情を図り知ることはできない。

困惑を浮かべ曇らせているのか、それともいつもの微笑みを湛えているのだろうか。

「お話ししよう」

イズミの表情は、戸惑いでもなければ微笑みでもなかった。迷いの無い強さ溢れる表情だった。

しかしその顔もすぐに変化した。

子供を諭す母親のような優しい微笑みを湛えていた。口を開いた。

「ソラのお母さんやお父さんは、今どこで何をしていますか？」

「うーん……わからないよ」

その曖昧な返答には、どのような意味が含まれていたのだろうか。純粹に現在、この瞬間に、ソラの両親がどこにいて何をしているのかということが不明なだけなのか、それとも。

イズミはその答えに小さく頷いて、話を続けた。

「私の母は、元々体の弱い人でした。ですから私を産んですぐに亡くなってしまいました。その表情も仕草も温もりさえも知らないう

ちにこの世からいなくなってしまうました。ですから私にとって親というものは父が全てでした。そして父はこの世の全てでもありません。父の穏やかな表情、見慣れた仕草、暖かくて優しい温もり、その全てが大好きでした」

イズミは手のひらをソラの頭に載せ、髪をゆっくりと撫でた。ソラはくすぐったそうに肩をすくめて笑った。

「――私の父は落語家でした。この町には娯楽が少ないものですから、そのような芸事は重宝され、楽しまれていたんです。私もその一人でした。父の話す、愉快なお噺の数々が大好きでした――」

「イズミ、お祭りは好きか？」

優しく微笑みながら、父は尋ねました。父はいつも、そんな質問を私にしてから噺を始めます。

「うん、すき。一年に一回だけあるお祭り、だいすきだよ」

私が答えると、父は優しく微笑みかけました。そして私の頭に大きな手のひらを載せ、髪を撫でてくれました。とても温かい手のひらは私を安心した気持ちにさせ、自然と笑みがこぼれました。

「今回の噺は、年の初めのお祭りに行く親子の噺だ」

若草色の着物を着こなし、座布団に座り、私に向き合います。

季節など関係ありませんでした。父は毎日、一回だけ私に楽しいお噺をしてくれました。朝起きたとき、昼食の途中、夕食のあと、布団に入る前、入ったあと、私がお噺を聴きたいと思ったときに、丁度良い頃合いに話し始めてくれました。

「こほんっ」口元にこぶしを当て、小さく咳払いをします。その動作は父が噺を始めるときの癖であり、合図でもありました。私は父の咳払いが聴こえる瞬間をいつも待ち望んでいました。

『初天神』

古くからある古典落語の一つです。一年の初めのお祭りの日、父親は「何にも買ってくれなくていいから、連れてけー」とねだる息

子を嫌々ながらも連れて行くことにします。

ですが道中、息子は言います。「なんにもねだらなくて良い子でしょ？　だから、なんか買ってー」……これではいつもと同じです。仕方なく買い与えると、今度は風屋さんがありました。食べるタコじゃありませんよ？　風揚げに使う、あの紙製の……そうです、あれです。

大きな風を買わされてしまった父親は「揚げ方の見本を見せてやる」と言い、高く高く揚げ始めました。こうなると楽しくて仕方がありません。父親は、風の紐を持ちたがる息子をそっちのけにして高く揚げるのに夢中です。

あまりにも楽しげに、自分勝手に遊び始めた父親に向かって、すっかりふてくされた息子は言いました。

「こんな父さん、連れてくるんじゃないよ。——おあとがよろしいようで」私の父は頭を下げ、話を終えました。

本来、『おあとがよろしいようで』という言葉は、次の順番の嘶家さんの用意ができましたよという意味の決まり文句なのですが、父は明日の自分に向けてこの言葉を付け加えます。明日も嘶をちゃんとするからね、と。

私は手が痛くなるまで拍手を続け、お腹の筋肉が引きつりそうになるまで笑いました。

「女の子がそんなに大げさに笑うもんじゃないよ。もっと上品に笑いなさい」

「あはははーっ」

父のたしなめも聞かず、私はいつまでも笑い転げていました。それだけおもしろかったのです。

父はやれやれといった風に首を振っていました。

私はそんな時間が大好きでした。

しかし、どんな嘶にもオチはあるものです。そして、オチの無い落語など面白くも何ともありません。

——ある晴れた日。

私はいつものように、賑わう市場の喧騒から離れた路地裏で、父から教わった嘸をそのまま披露していました。

「おあとがよろしいようで」

父がするのと同じように、頭を下げて嘸を終えます。私は父がしてくれた嘸を、次の日には一言一句違うことなく演じることができました。何故だか解りませんが、言葉が自然と口について出てきてしまうのです。

目の前には男の子。

大きな体を揺るようにして笑っていました。大きく開いた口からは並びの悪い歯が覗いています。

「めちゃめちゃおもしろいっスよーっ」

その子は私が同じ年の幼馴染みであるにも拘らず、なぜか敬語を使つて話します。

曰く、

「師匠にタメ口はきけないっスよ！」
だそうです。

私が弟子入りを許可した覚えはありませんでしたが、いつのまにかそのようにことは運ばれていたようです。私は弟子を取ることに取り立てて異論はなかったので、構わないのですが。

「さすがっス、師匠！やっぱし、師匠の落語はモノが違うっスよ。なんつーか、心にひびくよーな、そいでめっちゃめっちゃ心から笑えるよーな。あと……かわいいっス、めっちゃめっちゃかわいいっス」

「そうですか？ありがとうございます」

つい、私も敬語を使つてしまいます。丁寧な言葉で話されると、思わずこちらもへりくだつてしまうこと、ありません？ そんなわけで私にはいつのまにか敬語癖がついていました。

私とコウジさんは、生まれた直後から互いを知り合っていました。まるで双子の兄妹、もしくは姉弟のように、いつでも二人は共に遊び、笑い、歩いてきました。

このカミヤという素晴らしい町で。

生まれたこの町の下で、私たちは平穏な日々を送っていました。コウジさんの褒め言葉はのべつまくなしです。様々な心地好い単語が溢れ出る湯水のように並べられていきます。なので意識しなくても笑みが零れてしまえます。

晴れた日の午後は、そんな風にして遊んでいました。それが当たり前前の風景でした。

笑い合っているうちに、表の市場が騒がしいことに気がつきました。賑わっているのはいつものことですが、今は異常です。狂気に近い声も聴こえ、もはや暴動と言っても差し支えない荒れ具合でした。

「なんか、あつたんスカね」コウジさんは冷静に呟きましたが、興味津々で今すぐにも駆け出したいという心情はバレバレでした。「ダメですよ？ このようなとき、私たち子供はじっとしていた方が得策というものです。それに、大人の紳士はなんにでも首を突っ込もうはしないですよ？」

「そ、そうっスよね。気にしないほうがいいっスよね！」

どこか矛盾した説得でしたが、どうやら分かってくれたようです。呆然と眺めていると、路地に男の人が入って来ました。必死の、今にも崩れ落ちて泣きじゃくり出してしまいそうな表情をして駆け込んできたのです。

その方は茶色くくすんだエプロンを身に纏い、口髭を控えめに蓄えている細身の男性でした。そして私の隣にいる少年によく似た顔をしていました。そう、他でもないコウジさんのお父さんです。

「どうしたんだよ親父、んな急いで……」

「イズミちゃんっ！」

コウジパパは、コウジさんの心配の声を余所に私の名前を叫びました。

ぞくり、悪寒がしました。背筋に氷柱を差し込まれたかのような、冷たい嫌な気持ちです。空は雲ひとつ無く晴れ渡り、陽の光が燦々と降り注いでいるというのに、私にだけ冬が訪れたかのようで

した。

「はい……」辛うじて返事をします。

そのか細い声が届いたのかどうかは分かりませんが、コウジパパは続けました。

「イズミちゃんのお父さん——カイトが倒れた」

流行り病でした。

父は先日まで落語の興行のため、砂漠を越えた他の村まで出掛けていました。そのときに貰ってきた病原菌だろうと推測されました。

罹ったら最後。家族との最後のときを過ごす暇も無く、夥しいほどの辛苦と共に息を引き取ります。病気というよりは、残忍な悪魔が死神の所業に近いものに見えました。厭らしく口角を吊り上げる悪魔の姿に。

病がカミヤの町中に広まるのは時間の問題でした。穏やかな町は地獄と化していました。

二人は私の家までおぼつかない足取りのまま走っていました。感染の危険性などは微塵も考えていなかったのです。子供には移らないということを知ったのはもっと後になってからでしたが。

市場のある通りは、普段の喧騒を二乗したかのように混み合い、其処此処に倒れた人を看病する人ばかりができていました。名前を叫ぶ声や怒りを露わにした声が其処彼処から聞こえます。私は人だかりの中心に目を向けないようにしました。

父の姿をそこに見つけてしまうような気がしたからです。

……………。

言葉が出て来ませんでした。

数時間前まで普通に会話し、笑っていたはずの父の姿はベツノモノへと変わり果てていました。ベッドに臥する別の存在でした。口元には吐血のあとがこびりつき、ひゅうひゅうとかわいた音をたて

て喘ぎ酸素を渴望していました。この半日で十も二十も余計に年をとっているかのようでした。父の周りの季節だけが急速に流れ、私はひとり取り残されたような気分でした。

他の人達はただならぬ空気を察してか、席を外しているようでしたが、私にとってその心遣いは苦痛以外の何物でもありませんでした。誰かにこの身を投げ出してしまいたいのに、隣には誰もいません。お母さんもいません。最期を迎えようとする父だけがいました。

「お父さん……？」

そんな一言すら、言ってしまうえばもう返事が帰ってこないような気がして、口にすることが出来ませんでした。重くのしかかる乾いた空気と晴れすぎた空からさす陽の光だけが我が者顔で部屋を埋め尽くしていました。

いずれ終わりが来ることは分かっていました。子供なりに「死」というものの存在を理解し、受け入れてきたつもりでした。でもこの心のざわつきはなんなのでしょうか？ その問いの答えが帰ってくることはありません。なぜなら私は、ベッドに横たわる父の姿を黙ってみていることしかできなかったのですから。

何か話さないと。お父さんと少しでも沢山の話をしなないと。でないと、もう――。

そう思うたびに、舌がぐるぐると巻きついて、発声の邪魔をします。息さえ詰まりそうです。

ここにいても、私は何もできない。

苦しむ父を目の前にして、そんなことを考えました。いつそ逃げ出してしまいたい。そして誰も知らない場所でひっそりと暮らしたい。何の憂いもなく、美味しいものを食べ、面白い本を読み、幸せに暮らしていく。そうだ、コウジさんを連れて行くのもいいかもしれない。それなら話し相手に事欠かないし、私が落語を演じればいつだって笑ってくれる――。

「イズミ」

声がしました。

魚屋のおばさんの声でもなければ、コウジさんの声でもありません。もつと聴き慣れた声。落語を話す声。笑顔になる声。大好きな声。

「お父さん……？」

それに答えるため、声を絞り出します。蚊の鳴くような細かい声しか出ませんでした。

「……なんて顔してんだ、イズミ」お父さんは顔をくしゃつと歪めました。もしかしたら笑ったのかもしれない。もうすでに、普通に笑うこともままならないのかもしれない。「もつと笑っている。いつでも笑っていれば、どんなにつらいことも乗り越えられる。少なくともお父さんはそうしてきたからな。な、イズミ……」

大きな手のひらが、私の頬に触れました。そして目を拭きます。見るとお父さんの指が濡れて光っていることに気が付きました。

「……お父さんはもうすぐ死ぬんだ。イズミなら『死ぬ』ってことの意味、分かるだろう？」

「……うん」

温かな手が私の頭を撫でました。褒めてくれるときにはいつもそうしてくれました。

「泣くな、なんて難しいことは言わない。泣いたっていい、そのあとに笑えれば、それでいいんだ。——だから、お父さんに笑顔を見せて欲しい。最後の、笑顔を」

「じゃあ、お祈聞きたい」

それだけが、今の私が笑顔なれるただ一つの方法。これまで数え切れないほど繰り返されてきた父の祈。

私はそこから全てを学ぶことができました。

そして父のする祈には全てオチがありました。

最後には笑えるように。

そんな意味が含まれていたのだと思います。悲しみのままに終わっていく話はひとつとしてありませんでした。風邪を引いたとき

も看病をしながら喋り続けてくれました。雨降る日も風吹く日も父の声はよく通りました。

その演目は私の知らないものでした。しかしそれでいて、どこか共感でき、感情をすんなりと移し入れられる噺でした。とても悲しい感情を。

——それは旅する少女の話です。

悲しい、悲しいお噺です。

少女は旅をしていました。長い長い旅。終わらない旅。それはとても自由で素敵な旅のように思えるかも知れません。少しの憂いや気兼ねもなく、腕を大きく振りながら歩き回ることが出来るのですから。

目的地のない旅というものはこの上なく自由で、それはまるで大気の中を飛び回る鳥のように優雅で美しいものです。疲れたら目についた木々に止まり、色鮮やかな木の実を啄み、その羽根をやすめます。退屈ならば、仲間を探して会話し、笑い合うことが出来ます。

しかしそれは光の世界の話。程よい枝と美味しい果実と愉快的な友人が存在する世界の話。

しかし——暗い闇しかないその世界で、自由な旅というのは苦痛以外のなにものでもありませんでした。

枝も果実も友人もいません。青空や大地もありません。

——少女と、悲しみ。

その世界に存在するのはその二つだけでした。

少女は歩き続けています。終わりのない闇の世界を、痛む脚を押さえつけながら、一步一步、歩み続けているのです。鉛のように重い体を前進させているのです。痛みを誰かに訴えることも体を預けて休むことも出来ず、たった一人で歩き続ける少女は、永遠の世界をさ迷い歩いているのです。

息は絶え絶え、虚ろな瞳には生きる気力さえ感じることが出来ません。悴んだ指を暖める術はなく、乾ききった喉を潤す水もあり

ません。深呼吸をするだけで喉の辺りに激痛が走ります。つまづいて膝を擦り剥けば赤い血が止め処なく流れ出ます。

そんな痛みを感じながら。

涙を流すこともなく。

少女は歩いていました。

ただ単に、それが生きることだと思っていたから。立ち止まってしまうと、世界が終わることを知っていたから。

父が話してくれたのはそんなお嘸でした。

私は涙を流しながらじっと聞き続けていました。闇の中を歩く少女に心を寄せながら、少しでも痛みを共有して分け合えられればいいと思いつながら、父のかすれて聞き取りにくくなった声を耳に染み込ませていました。

その嘸にオチはありませんでした。

いつも父が話してくれていた楽しい落語とは違い、緩やかに流れる川のせせらぎのように終わっていききました。

——演じ終えた父は、満足げに笑っていました。

ここからは後日譚——もしくは現在の話になります。

病を持ち込んだ張本人の娘である私を責める人間は誰一人としていませんでした。誰もが情け哀れみの目を向け、優しく接してくれました。笑うことのなくなった私に見せ付けるかのように微笑みを浮かべていました。

いつそ、排斥してくれた方がましでした。

蔑みや嘲りの目で見下し、暴力を振るってくれたほうが折り合いをつけることができました。独り、誰もいない部屋に閉じこもらせてくれたなら、どんなに救われたことでしょうか。自己嫌悪の螺旋へと私を叩き落してくれたなら、ほんの少しの苦痛にさいなまれるだけで済むというのに。

なのに、カミヤの人々は残酷でした。私に涙の一滴も流させて

はくれませんでした。泣きじゃくる私を立ち上がらせ、前へと歩かせようと画策しました。

両足を掴まれたように動けない私は、なすがままに悲劇の少女を演じていました。人前では涙の一滴も流さず、作り笑いでその顔を塗り固めていました。そうすることによって、地獄と化していた町がもとに戻っていくのであれば、と自分に言い聞かせて。耳にタコができるまで、聞き飽きるぐらいにそんな言葉を呟いていました。「違っつスよ」

下手な敬語が聞こえました。それもまた、聴きなれた声でした。「そんなの、イズミさんらしくないっスよ。いままでのイズミさんは、そんな笑い方じゃなくて、心から笑ってたっス。終わった世界さえ照らしちゃうような明るい笑顔をしてたっス」

コウジさんがいつにない真剣な表情で立っていました。闇の中に一条の光が見えたような気がしました。

「俺はそんなイズミさんが好きなんです。落語をしてくれているときの楽しそうな、女神みてえな、小さな花みてえな笑顔が好きなんです。花なんて見たこともねえけど、楽しい場所には花が咲いてるもんです。だって、地獄に花は咲かないでしょう？ 独りきりの部屋の中に、花は咲いてないでしょう？」

「コウジさん……」

「いいんスよ、泣いても。俺の胸の中でなら、誰も見えやしませんから」

馬鹿みたいです。本当に馬鹿みたいです。

一瞬、自分が嘸の中に入ってしまったのかと思うほどに、全く持って現実味がありませんでした。はて、この嘸は何という題名でしたでしょうか？ 知っている限りの落語の演目を思い出していきます。あれでもない、これでもない。私は聞いて来た一つ一つの落語の全てを克明に思い返すことが出来ます。自分でも怖いくらいに耳に残っているのです。

それでもこの状況に該当する嘸はひとつもありませんでした。

涙の出る落語など、聴いたこともなかったからです。

そんな思考の道順を経て、私は今が現実であるということと、ぼろぼろと流れ落ちる涙を認識することが出来ました。

地面を濡らす涙が乾くまで、私はコウジさんの体温を感じていました。弟子に涙を拭われる師匠なんて聞いたこともありませんが、今はそんなこと関係ありません。

声を上げて泣きました。

その涙を、生涯最後の涙にすると決めました。

父の意志を継ぎ、私はカミヤを治める事となりました。異論を発するものは誰一人居ませんでした。壊れた町に住む人々は、静かに空虚な笑いを浮かべていました。私はそれを肯定として受け取り、指導者の任に就きました。

「みなさん、私たちの故郷、カミヤは『世界の終わり』以来の重大な災厄に見舞われました。それはみなさんに肉体的にも精神的にもショックとダメージを与え、立ち上がることさえ困難な出来事であったことでしょう。——ですが、そう暗い顔をしてはいけません。ですが、底抜けに明るいのもいけません。疲れてしまうからです。——自分が楽しいと思ったときに笑い、悲しいと思ったときに泣けばいいのです。……私ですか？ 私はいつでも笑っていますよ、底抜けに。だって、この世界があまりにも素晴らしくて、楽しいものだからです。いけませんか？ ——ゆっくり歩いていけばいいのです。疲れたら誰かの肩に寄り添えばいいのです。——ですから、もしも傍に辛くて倒れそうな人を見つけたら、肩を貸してあげてください。そうすれば、どんなにゆっくりでも進むことが出来ますから。」

——世界を作っていくましよう。私たちだけの、美しくて、素晴らしくて、楽しい世界を」

私がこの世に生まれ落ちてから、14の年が経った時のことでした。

世界のことをまるで知らずに、ただ強くあろうと、あがき続けることを始めた年でした。

「父が最後にしてくれた嘸の意味は今でも分かりません。——でも、それでいいと思ってるんです。こうして誰かに伝えていくことによって、いつかその少女が救われることを願って、私は憂うことを止めたのです」

長い、長い嘸にイズミはその瞳を閉じることによって幕を下ろした。その表情に、演目を終えた嘸家の姿を垣間見たような気がした。しかし未だ訊かねばならない事柄は残っている。

「そうですね……」

通りに人が居ない理由。町の静けさと昨日の異常なまでの賑わいの理由。

「私の拙い演説など、何の意味もなさなかったんです。カミヤの人々の悲しみの根は想像を絶するほどに深いものだったのです。その上、束の間に優位に立ち慰め同情していた少女から、見透かされたように励ましの言葉などをかけられてしまったのですから、傷口に塩を塗りこまれたかのような鋭い痛みを覚えるのも当然といえます。そうしてしまったのも、私の若さゆえの過ちとしか言い訳の仕様がありません。——ですが『良薬口に苦し』ということわざにもあるように、どんなに良い薬も最初は苦痛を覚えるものなのです。何もしなければ傷口は悪化し、化膿していくだけです」

滔々と語るその瞳にはどこか空虚な光が宿っているように見え、普段は穏やかな彼女の奥底にある闇を垣間見ってしまったような気がして、俺は僅かに視線を逸らした。

「……でも、私は選択を間違えてしまったようですね。人が、年に一度しか通りに出ない町など、常軌を逸しています。いずれ、近いうちにこの町は……」

「花を、咲かそうよ」

ふいに。本当にふいに。声がした。

深淵に住む女神のような、とてつもない強さと穏やかさを持った声がした。

その声が、隣にちよこんと座るこの少女の口から発せられたとはまるで思えなかった。

一瞬、意味の理解さえ遅れる。異国の言葉であるかのように、無機質に脳へ響いていながらも、何故か胸の奥には暖かさが残っていた。言い得ない柔らかさ。

ハナヲ、サカソウヨ。はなを、さかそうよ。花を、咲かそうよ？

「ソラ、どうして花なんかを？ 何の解決にもなっていないだろ」

「だいじょーぶだよ」

「どうして」

「花があればみんなが笑顔になれるから。そうすれば、みんななかよし。それで、じゅうぶんじゃないかな？」ソラはにっこりと微笑んで話す。

俺が旅を続ける理由。

それは人を笑わせて、一度終わった世界をあたたかくすることだった。そのために落語を始めた。そのためなら旅路の苦痛も忘れられた。打算のないソラの提案は、俺の目的を達成させる近道となりうるのではないだろうか。

否定する理由がなかった。

そしてイズミは。カミヤの町をたった一人で守り続けてきたこの女性は、どんなことを思っているのだろうか。幼い少女のあまりにも短絡的かつ明解な提案をどのようにして受け入れ、または否定するのだろうか。

もしも強さを持っていたならば。

もしくはどうしようもなく弱い存在であったならば。

「ボク、思うんだよ。人が笑うのに、そんなに理由が必要なのかな、って。いろんな過去とか感情とかを押し殺して、涙も堪えてまで無表情で過ごす意味、あるのかな、って。——そうでしょ？　どんなときでも笑っていればいいんだよ。楽しいことがなくなつて、悲しいことばかりが起こつたつて、笑っていればいいんだよ。それだけで楽しくなれるから。そうすれば、周りの人も笑えるようになって、世界中のみんなが笑顔になれるから。笑いはつづいていくんだよ。」

——終わらない旅と同じように」

ソラは笑顔で、とても強い笑顔で言う。まさにその姿は何の憂いや悲しみもなく、ただ楽しげに見えた。

「みんなが笑顔になれる、名付けて『あつたかりフレイン』の完成だよ」

あつたかりフレイン。なんとも幼稚な響きだが、この世界に、今の俺たちに必要な言葉なのかもしれない。

俺は時々思ってしまうことがある。その考えは、旅の途中、不意に頭を過ぎつては混乱に陥らせ、苦しませる要因だった。時と場所を問わず、付き纏つてきた思索だ。

——甘いのではないかと。

他人を笑わせることで、終わつた世界を変革することなど不可能なのではないか。俺の旅路は全くの無意味であり、本質を見れば単なる自己満足を達成させるためではないのではないかと。

その疑問を愚かだと笑う者もいるかもしれない。目的とはそれを完遂させるそのときまでは、単なる願いや祈りの類でしかなく、不毛な戯言と大差はないのだと言って、一笑に付すことのできる人間も存在しているかもしれない。

しかし俺はそこまで強くなれない。様々な疑問と矛盾を背負つたままでいないと不安で仕方がないのだ。人間とはそういう生き物だ。

「いいのでしょうか。私はそれで救われるのでしょうか……」

「おうよ！　もう大丈夫っスよ、イズミさんっ！」

「コウジさん……」

先程までは居なかったコウジが部屋の中に立っていた。口ぶりが察するに、少し前から話を聞いていたようである。

「イズミさんはなんでも一人で背負いすぎだ。もっと他人を頼っていいんすよ、楽に生きてもいいんすよ」

「でも、私がしっかりしていないと……」

「だからそれなんすよ。別にしっかりしなくてもいいんですって。」

——それにイズミさん、言ってたじゃないすか。いつでも笑っていきましょう、って」

「……」

「な、嬢ちゃんもそう思うだろ？」

「うんっ。笑ってればいいんだよー」

コウジとソラは、子供のような無邪気な笑顔を見せている。それはイズミが普段見せていたようなものとは程遠く、決して上品ではなかったが、純粋な笑顔というものは本来こんな感覚なのかもしれない。

俺にはこんな笑い方はできない。イズミはいつも穏やかな笑顔しか作らない。

俺は笑いで世界を変えろと言った。

イズミは笑いでカミヤを救うと言った。

大それた物言いをしてながら、実行できていないのは何故だろうか。自らが心から笑えていないのに、他人を笑わせることなど、できるはずがないではないか。イズミもそれは自覚しているはずだった。だからこそ、必死に笑うことができていたはずなのだ。

——しかし。

結局、強いのは、この馬鹿二人なのだ。

もっとも大人であったのは、もっとも子供のように振舞っているソラとコウジなのだ。世界に対して様々な想い——辛さや憎しみや苦しみや蔑みや絶望——を俺たちと同じように抱いていながらも、いつも大きな口を開けて笑い、馬鹿を演じていた。

強くあらねばならない、と思う。いつだって考えている。……それがどのような形で体现されるのか、実像を持たないままにひたすら求め続けていた。見えない強さにいつもすがろうとした。

その強さは、ここにあった。

コウジとソラは強さそのものだった。笑いがあれば全てを変えられる。楽しくあれば憂いや悲しみなどを遠ざけられる。自分と切り離すことができる。

それだけを頑なに信じて——否、この二人は元々知っていたのかもしれない。思考し、選択するまでもなく、その事実を知りえていたのかもしれない。

それを強さといわずに何と言おうか。俺には言葉が見つからなかった。

「俺は……」不意にコウジは真剣な表情をした。この表情もまた、俺には出来ない顔だ。「笑ってるイズミさんが好きなんス。いや、もちろん真面目な顔も好きっスけど……」真顔が刹那にして、照れたような笑顔に変わる。「やっぱり笑顔が一番かわいいっス。ほんと、それだけなんスよ。結局、かわいいイズミさんを見たい、っていう俺の願望でしかないんスよ。——でも、今は泣いてもいいから、そしてまた、歩き出せばいいから」

イズミは、語りかけるコウジの顔を力強い眼差しでじっと見つめ続けていた。長い間、寄り添い歩んできた幼馴染みの顔を、穴が開くくらいに、ただただ見つめていた。その姿はまるで、好奇心旺盛な幼子が見知らないものに興味を引かれているかのようなだった。瞳は潤んでいる。

目尻を乱暴に拭った。したたかに瞬きを繰り返した。涙が流れることのないように、感情に抗っていた。

「……泣きません」きつ、と鋭い眼差しを向ける。今までにない、これまでの母性的な面に対して、とても力強い表情をしていた。「あの日。……父が死に、カミヤの人たちが大勢死んだあの日。……コウジさんの胸で泣いたあの時。私は、もう二度と泣かないと決め

たんです。何があるうと……っ」

地獄のような日々。孤立していた時間。

それを抜け出し、平穩を手に入れた今。

イズミが見せた初めての弱さ。それがこの激情となって表れていた。ささやかな抵抗だった。弱さを見せまいと尽力するがゆえの弱さだった。人は誰しも例外なく弱さを持っているというのに、イズミはあからさまに偽りの強さを誇示し続けようとしていた。

——それはすべて、カミヤの町と、ここに住む人々のための抵抗だった。

「私も、お二人と同じように、笑っていればきつと救われると思っていた。そして、そのことを信じてきました。……でも何も起こらなかった！ 日々をどんなに明るく過ごそうとしても、町の人たちは外へ出ようとはしなかった！ 病を怖れて、他人と関わることをやめてしまった！ ……年に一度の祭りの日。病の流行したあの日だけは、何とか人々は活気を取り戻してくれました。でも、そんなことじゃ意味がないんです！ 当の昨日だって、笑っている町人は私とコウジさんの二人だけ？ そんな町に、どんな希望があるというんです？ 笑っているだけで、どうして全てが収まると思うんです……？」

誰もが押し黙る。水を打ったような静寂が支配し、息遣いさえもやかましく聞こえる。

町からは何の声も聴こえては来なかった。

「……私のことは、放っておいてください」

それだけを言い残し、イズミは階段の上へと姿を消した。

残された三人はしばらくの間、静寂に身を任せていた。様々な感情の渦巻いているこの部屋は、何とも息苦しく感じられた。

コウジは何も言わずに出て行った。俯いていた所為でその表情を読み取ることではできなかった。

今には俺とソラだけが残された。ソラは床を力無い眼差しで見つめていた。普段の笑みは消え、落ち込んでいる様子である。

「ボクの……せいだよ」

長い沈黙を打ち破り、ソラが口を開いた。その声調は低く、暗かった。

「……ボクがあんなこと言ったからイズミさんは怒っちゃたんだよね？」

「そんなことはない。人にはそれぞれの考えがあるんだ。おまえは間違ってるんじゃない」

「ううん、間違ってたよ、ボク。……笑っているだけなんでも解決させようなんて、虫が良すぎたよね。だって、今だって笑っててもどうにもならなかった……」

音を立てて、何かが崩れていくような気がした。耳を塞ぎたくないようないやなノイズが響いている。

世界の終わりでは、どんな音が響いているのだろうか。美しい旋律か、奇妙な雑音か、それとも無音か。

今このときに世界が終わるといふのなら、答えはノイズ。決して耳になれることのない雑音、騒音。両手で塞いでも無駄だ。それは内側から響いている。

しかし、世界は終わっていないかった。まだこの世は続いている。……一体ここはどのような世界なのだろうか。

何も起こらなかった世界、とでも言うべきか。

そこには平穏が広がっている。それは紛れも無い平和、誰もが望んでいた世界平和そのものだ。争いや違いがなく、全ては一定の速度で、決められた一本の終わらないレールを進んでいく。旅路を邪魔するものなど何も無い。楽しいことなど何も無い。誰もが口を閉ざし、黙々と平穏に日々を過ごす、つまらない世界だ。

そんなのはいやだ。

それに、この世界は既に何かが起きている。悲しみや楽しみだって存在している。そこまでつまらない世界ではないはずだ。それでは何だと言ふのだ。ノイズの鳴り響くこの世界は。

答えは。

俺の答えは。

——少しでも進むことだ。

そうしていれば、いつかは辿り着けるかもしれない。世界の答えに。

「出立は、いつにしようか」

「え……？」意外そうな声を上げた

「花を咲かせるんだろ？ だったら、いつにするんだ？ 今日はもちろん日が暮れるからな、明日か明後日にでも……」

「……今日がいいよ」

「だから直に日が暮れるつての」

「行くのなら今日じゃないとダメ、だよ。絶対に」

強い瞳に気圧される。先程までの気弱さはどこかに消えており、今では毅然とした光が宿っていた。ソラはソラなりの決心がついたのであるうか。

「もう、夜を越したくは無いから。ずっと歩いていれば、夜は来ない気がするから」

「あの夢は毎晩見ているのか……」

暗い闇の中を、重い脚を懸命に持ち上げながら歩いていく夢。それを見るたびに、ソラの脚に痛みが走る。

「脚は、もう痛まないか？」

「うん、だいじょーぶ。ぜんぜん平気」とんとんつ、と床を踏み鳴らす。「さあ、出ようよ。日が暮れちゃうから」

「ああ」

ソラはくりりと部屋の奥、階段の方を見上げて呟いた。
「待っててね、イズミさん。きつと、笑わせて見せるから」

外はまだ明るかった。季節の所為か、日暮れの時刻が思っていたよりも遅いようで、昼間特有の嫌な熱気も健在である。

にもかかわらず、やはり人影は一切見ることが出来ない。この

状態が来年の昨日まで続く町は異常以外の何物でもないことは明確だった。

戸の閉められたパン屋の前でソラがその名を呼ぶと、程なくしてそいつは顔を見せた。

いつも馬鹿を言っていたその表情は暗く変わっていた。不機嫌そうに細められた目は真っ直ぐこちらに向いていた。

その顔に向けて俺は言う。

「花を探しに行くことにした。それが解決になっていなくとも、それ以外の方法が見つからないんだ」

「……」

「俺は、おまえのように馬鹿にはなれないからな。せめて、できることだけをするにしたらんだ」

コウジは表情一つ変えずに聞いていた。どんな思考をしているのかは分からなかった。

続けてソラが話し出す。コウジの視線はゆっくりと俺の隣に移動した。

「ボクも本物の花なんて、見たことないよ。でもボクも、イズミさんの笑顔をきれいな花みたい、って思ってたよ。だからきつと、花を咲かせれば、イズミさんも花みたいに笑ってくれると思う」

理屈はまるで通っていないかった。ソラは本当に説明や意見することが下手だ。それでもその思いは伝わっていた。

「……そうか、行くのか」覇気のない声とともにコウジが口を開いた。

「ああ、止めてくれるな、俺たちはもう決めたんだ」

「……気をつけていけよ」

「当たり前だ。旅人を舐めるなよ」

「……まったく、出来のわりい弟子を持ったもんだぜ」自嘲気味に笑う。

「同感だ」

コウジの笑い方は、今までのような豪快なものではなく、控えめ

に力なく笑むのみとなっていた。この町の人々は、皆そのようにして笑うのだろうか。

漠然と、急がなくてはならない、という気がした。コウジとイズミが町に飲み込まれるその前に。

「……行くならとつとへ行けよ。そろそろ日が暮れていく時間だ」

「分かってる。しかし少し聞きたいことがあるんだ。この近くに植物の自生している土地とか、栽培している人間は……」

「……知らねえよ」

「どこかしらにはあるだろう？ 長年住んできた場所ならなおさら」

⋮
└─

「……けよ」

「あ……？」

「とつとへ行けよ！　迷ってんじゃねえよ！　とつとへ行けええええええええええ！」

わけのわからないまま、その剣幕に気圧されるようにして俺たちは踵を返し、町の出口方面へと足を踏み出した。

「待っててね、コウジさん」

ソラの呟きに、コウジは何の返答もしなかった。

脳裏にはコウジの叫び声がいつまでも残って、繰り返し響き続けていた。

「ねえ、ダイチさん」

「なんだ？」

「占い、興味あるかな、信じてるかな」

「いや、取り立てては」

「そうなんだ。ボクは信じてるよ。占いの結果が良ければうれしくなるし、悪くてもこれからがんばろうってゆう気になれるから」

「ま、ものは考えようだな」

「うん、それでも信じてるよ」

ゆったりとした歩みはそのままに、ソラは小さく笑みながら話す。風にたなびく長い髪が、小さな体に対してやけに大げさなものに見えた。

「とゆーことで、ボクがダイチさんを占ってあげるよ。それでは第一問っ、生年月日はっ？」

「それ、占いか？」

「こうゆう占いなんだよ。いいから答えて」

「生年月日か。……忘れた」

「じゃ、第二問っ」

「いいのかよ、今ので」

「うん、だからこうゆう占いなんだってば。——第二問っ、趣味や特技は何かなっ？」

「落語……だろ、やつぱり」どんなに下手と言われようが、本人が好きと言えばそれは趣味として認められるだろう。

「第三問っ、運命、って信じる？」

「信じない」

「第四問っ、病気にかかったとき、どうする？」

「気合で治す」

「第五問っ——」

典型的というのか、当たり障りの無い質問がいくつか続いた。本当に俺の回答を占いに生かしているのかは疑問である。

「第……何問だっけ？」

「十問目な」

「わ、よく覚えてるね、ダイチさん。すっごい記憶力だよ」

それ以前に質問者が忘れているのもどうかと思う。とてつもなくアバウトな占いのようだ。

「第十問。……世界の終わりって、なんだったのかな」

ソラは歩調を緩め、やがて止まった。俯き加減の表情を読み取ることは出来ないが、その顔に笑みが浮かんでいるはずは無かった。

昨日の記憶が、しばらくそのなりを潜めていた記憶が突如甦った。

イズミの家の窓から見た風景。カミヤの本当の風景。世界の終わりの残滓はあまりにも凄惨で、現実味を帯びすぎていた。触ればまだ温かみが残っているのではないかと思うほどに、リアルな残骸がそこには在った。

そうだ。ソラはその風景を見て、倒れたのだった。血の気をなくした人形のように。電源の切れたロボットのように。翼を失った鳥のように。

いままで、何故そのことを思い出さなかったのだろうか。考えずにいられたのだろうか。

「世界の終わりって、一体なんなのかな。どうして世界は終わっちゃったのかな。教えてほしい」

ソラは質問を繰り返す。

「それは……だな——」

気付くと俺は口を開き、何かを話し始めようとしていた。——一体どんなことを答えようというのだろうか。世界の終わりについて、俺は何を知っているというのだろうか。

もちろん何も知らない。見たことも無い、「あっただけ」という史実について、淡々とうそぶくことなどできるはずがない。

だがこの感覚は何だ。

既視感とは違う——歯に挟まってなかなか取れないスルメのような、普段眼鏡をかけている人が不意に外し、なんかパーツが一つ欠けて物足りないような——言い得ない感覚が胸を突いている。ふざけたような比喻表現を用いてしまったが、とにかくとてつもない歯痒さを察してもらいたい。このような場合、日常的な例えをしたほうがより一層伝わりやすいことを経験的に知っている。詩的で深みのある表現よりも目に見えて伝わっているはずだ。

俺の喉は、口は、どんな言葉を発しようとして、その筋肉を収縮させようとしているのだろうか。俺はそれを知りたくて仕方なかった。

しかし思い直す。

「——分からない。俺が知っているはずないだろ」
無難な答えを返していた。無下にソラを混乱させたくなかった。

同時にこれは単なる占いなのだ。まともな返答などを期待しているはずが無い。占いのための軽いプロファイリングでしかないのだ。

何気なくこぶしを握ってみると、なぜか手のひらが汗ばんでいるのが分かった。

「……うん、そうだよね」

ソラは笑った。どことなく安堵したような、それでいて残念そうに見えたのは俺の思い過ごしだったのだろうか。

「それじゃ、第十一問っ——」

砂漠の旅路は、遮るものが何も無い。

景色の変化も皆無。永遠とも思える白い砂と澄み渡る青い空が続いているだけなので、娯楽の類も一切存在しないのだ。よって、会話に花が咲く。

横並びの歩き方もその一因となっている。面と向かって話し合う状態よりも素直に口が回っていくのは道理というものだ。

「結果発表っ」

燦々と陽の照る砂の上を歩きながら、長らく続いた質問責めは終

了した。

占いそのものを信じていないとはいえ、ここまで来たからには、その結果に若干の期待と緊張を抱かずにはいられない。

「ダイチさんの運勢は……わかんないよっ」

「何でだよっ！」

「わ、つつこまれた」

「そりゃ突っ込むだろ。いままでの質問はなんだったんだよ、随分とありとあらゆる事柄を訊かれたよ。答え損か、俺は？」

「じよ、じようだんだよ。じようだん」

「なら、いいが……」

「本当のダイチさんの運勢は……すつごく一番最高だよ」

「一番と最高、意味一緒だから。あと、今考えただろ、おまえ」

「ち、違っよっ。これまでいっぱいしてきた質問をもとに、せいかくに弾き出されたでーたにもとづかれたけっかだよ」

しどろもどろに喋るソラ。最早、この少女に信憑性のある占いを期待した俺が馬鹿野郎だったと罵るほかに、怒りのぶつけどころを見出すことが出来ない。……あーあー、この大馬鹿野郎こと俺は、肥溜めにどっぷり肩まで浸かって反省しなけりや、まともな人間には戻れないほどに馬鹿野郎でござえやす。どうぞ肥溜めにお浸けくださいまし。……これでどうだ。

……しかし、俺のこのようなわけの分からない思考の循環はどこからやってくるものなのだろうか。気持ち悪いな。

とにかく、どんなに外れる占いであろうと、その滑稽な結果発表を聞いて大笑いするくらいの利用価値はある。俺は話の続きを促すことにした。

「なら、続きを聞こうか。これだけの質問をしたんだから、さぞ具体的な運勢を聞かせてくれるんだろうな？」

言ってやると、ソラは露骨に苦々しげな顔を見せ、もごもごと口ごもった。

「……ひ、ひどいよダイチさん」

「あ？ 非道な大工さん？ なんだそれは、悪徳建築士に欠陥住宅でも売りつけられたのか？」

「そんなこと言ってないよっ。それにボク、ヘンな家なんか買わないよっ」

「いや、自覚は無くとも、粗悪な住宅を買わされているケースは結構あるんだ。柱が異様に少なかったり、コンクリの量が足りなかったり。そんな家は軽い地震でも倒壊の恐れがあるからな。家選びは慎重になりすぎて損ということはないぞ」

「もうっ、何の話だよ、ダイチさんっ」

「だから家選び」

「ちがうよっ、占いだよっ。もう、そうやってからかう人、きらいだよ……っ」

俺自身もやり過ぎた感を自覚し始めていた最中、ソラが拗ねてしまった。ぶんむくれてそっぽを向いている。

漫画のような怒り方だな……などと言おうものなら口も聞いてもらえなくなること請け合いだろうことは自明の理であったので、素直に謝ることにした。

「悪い。少しふざけすぎた」俺は頭を少し下げる。

「ほんとに？ 反省してる？」

「ああ、もちろんだ」

「……うん。それならいいよ。ボクもきらいとか言っちゃってごめんね」照れたように笑うソラ。

「いや、構わない。やはり住宅は賃貸に限るな」

「だからそんな話してないってばっ！」

「——それで、占いの結果はどうだったんだ？」

「うん、じゃあ発表するよ……じゃじゃんっ」

占いというのは、んな軽い感じの効果音とともに結果を示すものなのだろうか。甚だ疑問ではあるが、占いに正しいも何も無いであろうと納得し、少女の口からどんな未来が語られるのかということに耳を澄ます。

「こ、こほんつ。えっと、ですね……。ダイチさん、あなたは……これからすつごく楽しい旅をすることが出来るです。それはそれは楽しい旅なのです」

取って付けたような丁寧語はイズミの影響と見て間違いないであろう。

俺はそこで質問を投げてみた。

「どんな風に楽しいんだ、その旅とやらは？」

「吐いちゃうくらいです」

「吐いちゃう!？」

「嘘です」

「ふざけんなよ、ソラ……」

「……えと、どんな風に、ですか? ……うん、すつごく相性ぴつたりのパートナーと出会うことになります」

「どんな奴だ？」

「うん、そのパートナーは、女の子で、一緒にいると楽しくて、きれいで、おいろけたつぷりな大人ななんだよ……ですっ」

よくもまあ、自分のことをここまで過大評価できたものである。

前半部分は納得してもいいが、もう半分は丸っきりの詭弁である。

この少女が大人の女性だというのは、この世の全ての人間は老人であるとしても差し支えないであろう。

「それ、絶対嘘な」

「ええっ、そんなことないよっ。ボクの占いは近所でも『とても良く当たるし、良心的だし、何より占い師が美人だ』って評判なんだからっ」

どこの近所だ、火星か? 喋り方戻ってるし。

「で、そんなステキなパートナー殿と出会った俺は、そのあとどうなっちまうんだ？」

「そのあとも、すつごく楽しい旅を続けてく。……それだけだよ」

「それだけか？」

「うん、それだけ。だって、たのしくって、笑えてれば、ほかに」

何にもいらないでしょ？　だったら、それ以上占う必要なんてないよ」

「そうかもな」

「でも、甘いものは必要だけだね。例えば……クッキーとか」

俺の提げているバッグを凝視しながら言うソラ。

ちくしょう、ばれていやがったか。見つからずに持ち出せたと
思っていたんだが。

ソラの占いは、ソラ自身の願望のように思えた。半ばインチキ
紛いのよくある占いよりも、余程それは高尚で有意義なものだ。将
来を運命だのと称して決め付けるものとは違い、それは人を傷つけ
ることをしない。

しかしソラは、この旅を本当に続けたいと思っているのだろう
か。ソラの言葉を、俺の隣に並んで歩いていきたいと解釈するのは、
少々自惚れが過ぎるのではないか。ソラには帰るべき所がないだけ
で、俺にまわりついてるのは食べ物にありつけるから、という
理由でしかないのではないか。

隣を見る。

ソラ笑顔を見れば、その考えがあまりにも愚かな邪推であつ
たと思わざるをえない。そして、そんなことを一瞬でも思つてしま
つた己に嫌悪の念を抱く。

この爛漫と笑む少女に、明かされざる思惑があるだと？　何を
考えているんだ、俺は。

「あれ？　どうしたのかな、ダイチさん。そわそわしちゃって。ま
さか、クッキーとか」

「持っていないぞ」

「えーっ。絶対持つてるよ、だってここから甘いにおいする」くん
くとバッグに鼻を寄せる。こいつは犬か。

「そいつは俺の体臭だ。バターの香りがするんだ、俺の体からは」
「そんな人いないよー。それに今まではそんなにおいしなかったよ」
「潜在能力だ。ピンチになると体臭がクッキーっぽくなるんだ。そ

れはまるでスカンクの如く」

「な、なんか、例えがヤだよ……」

「雨の日の排水溝の如く」

「変わってないよ……」

「とにかく、たとえ俺がクッキーを所持していたとして、そこから甘い匂いを発しており、おまえの腹がいくら空いていたとしても、今はやらん」

「えー、どうして」

「この旅はどこまで続くか分からない。花がいつ見つかるのか見当もつかないからな。だから食料は温存していかなければならない」
依然、花の姿はおるか、植物の一つさえ見つけるに至ってはいない。見えるものは白い砂と青い空だけ。

このまま歩き続けて、本当に花など見つかるのだろうか？

そんな不安が脳裏を過ぎるが、それはいつものことだった。旅の中においてそんな懸念は付き物なのだ。

自らの踏むこの道が正しいものである、と信じ続けることで心を落ち着かせる。それが憂慮の輪廻から逃れられる唯一の方法である。強い信念を持つことで、不安の重圧に窒息せずに済むのだ。

「そうだ、ダイチさん」何かを思い出したかのようにソラが声を上げた。

返事代わりにソラの方を向くと、そこには微笑みに目を細める顔があった。

「花の咲いている場所は知ってるのかな」

「知らん。真っ直ぐに歩いているだけだ。旅というのはそういうものだからな」

正直に答えると俺よりも頭二つ分背丈の低い少女は、呆れたように首を振りながら言い放った。

「ふふんっ、ダメだなあ、ダイチさんは」

したり顔で腕を組む。その姿を比喩表現を用いて表すとすれば、悪巧みを思いついたガキ。……ままである。

「ボク、花の咲いてるところ、知ってるよ？」

「ならおまえは知っているというのか、花の咲いている場所を……
って、何いッ!？」

「うん、知ってるんだよ」

ガキンちよの考えは悪巧みなどではなく、まさに救済の思想であった。御子供さまさまである。

「どうしておまえが知っているんだ？ イズミからこっそり聞いたのか？」

「ちがうよ」胸に手を当てる。「最初から知ってたんだよ。なぜかは分からないけど、ボクはその場所を知ってた。昔からそこに住んでいたみたいだね」

「そう……なのか？」

「うんっ、だからここからはボクが案内するよーっ」

大手を振って歩き出した。

そのソラは満面の笑みを浮かべているというのに、俺の中には言い得ない不安が渦巻いていた。

それは忽然と現われる屋気楼に似ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4980j/>

あるいは花でいっぱいの世界

2010年10月22日00時11分発行